Bestopia21 ベストピア
2017年02月
第360号
bestopia.jp
パリ通信
第62号

30年・360号大特集号

くすしき、喜ばしきことの連続でこの特集号を迎えることが出来ました感謝一杯です。ここ2年間、「高校生諸君」と唯、孫に呼びかけていたのですが、500人もの高校生が私の粗話を聴いてくださるという奇跡のようなことが起こりました。それも1月6日に決定しました。
10年前の240号は坂村真民先生を思い「タンポポ堂の思い出」を書きました。今回は　未来を切り開く『念ずれば花ひらく』と題して60分の講演をさせて頂きました。その内容を記念号とします。
講演日は2017年02月21日
福岡県立八女高等学校講堂

本号の構成は次の通りです
１，60分講演内容の全文・27頁
２，資料　36頁（内5頁は年譜 略解付き）

１,の全文は話し言葉になっています。資料を見ながら話をしています。

１，はじめに

⑴感謝の言葉

本日はお招きありがとうございます。生徒の皆さんは学年末テストが終わり早く自由な時間が欲しいところ、ここにお集まり頂き、貴重な時間を預けて頂きました。
時間泥棒にならないように精一杯の力を尽くします。

本日は私の生涯にとって最も嬉しい日でございます。
人生最高のの晴れ舞台です。
多くの困難を排してこの時を創り、
名もない私に、勿体ない機会を与えて下さいました校長先生始め、
全ての先生方、関係者の皆さまに心より感謝致します。
本日の私の課題は未来を切り開く「念ずれば花ひらく」の由来、
そして作者の坂村真民先生の生涯についてお話し、
若い皆さんの心に留まるメッセージをお伝えすることです。

始めにお手元の資料の説明をさせて頂きます。
Ａ４の1枚は今日の話の流れです。

池田　学作「誕生」の部分

未来を切り開く「念ずれば花ひらく」第505番碑。

レジメ

目的　「念ずれば花ひらく」の由来と意味を学ぶ

（話し言葉について。詩と師が頻繁に出てきます。聞き分けにご注意ください）

⑴追悼　「二度とない人生だから」唱和※①

⑵三大真民詩について

⑶真民先生のキャリア・ライン「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」6頁改訂しました。

⑷師との巡り逢い　「邂逅」※②

⑸命がけで生まれた「念ずれば花ひらく」※③

⑹三大詩に共通すること

⑺真民先生の願い

⑻後を継ぐ者たちの動き　碑の話

⑼鳥は飛ばねばならぬ・人は生きねばならぬ

⑽生きるとは、自分の花を咲かせること　唱和※①

「Pray,and any flower of yours will come out」

※①　唱和のところは皆さんでご一緒に読んで頂くところです。ご協力をお願いします。

※②　邂逅とは、単なる出会いではなく、求めていた者が、呼びかけに応える出会いです。
そして目がひらくといいましょうか覚醒する出会いで、今までの人生の路線とは異なる
新しい道が開かれる出会いです。

※③　念ずるとは、前向きに生きようとすることであって、希望なのである。
どん底に落ちても、念じながら這い上がってくる不屈の魂である

お詫び

資料2頁のレジメと異なりますので、捕捉します。

05　人生最初の達成感？二度目の達成感？は感じるように探してください。

07　成功とは「自分が定めた価値ある目的を、段階を追って実現すること」
そのためには、一里塚としての目標が必要です。目標は達成感に結びつきます。

09　CHANCEとCHANGEの違いは縦に並べて大文字で書くと分かります。

11，５Sとは、整理ー整頓ー清掃ー清潔ー習慣です。一つ一つの意味があります。
ある病院の5Sは①Safety　②Speciality　③Spirit　④Speed　⑤Smile　です

今回利用した参考図書は次の通りです

①随筆集　念ずれば花ひらく（柏樹社版）ーーーーー改訂版・サンマーク出版

②随筆集　生きてゆく力がなくなる時（柏樹社版）ー改訂版・サンマーク出版

③随筆集　愛の道しるべ（柏樹社版）ーーーーーーー改訂版・サンマーク出版

④自選　　坂村真民詩集（大東出版社版）ーーーーー改訂版・到知出版

⑤英文対訳「鳥は飛ばねばならぬ」英訳者・坂井孝彦（ぱるす出版）

案内

資料に略解が１から６迄あります。年譜より更に詳しい内容です。

興味がある方は、私のホーム・ページ　bestopia.jpをご覧ください。月末までにオンします。

30枚の資料は沢山の情報を書きました。。更に詳しい内容になっています。
話しの中でご一緒に唱和して頂くところがあります。その時はご協力をお願いします。
では、始めます。

⑵追悼ーーーまず始めに昨年逝去されました平川千万彦先生を偲び先生が愛誦された「二度とない人生だから」を皆さん全員で朗読したいと思います。
３頁を開いてください。
それでは始めに私が第一行目を読み始めますから、皆さん続いてください
「二度とない人生だから」全文を全員で唱和します。
ご協力有難うございます
このような詩をたくさん作ってこられた方が坂村真民先生です。
⑶使命感をもって詩を作った坂村真民先生　先生は詩を作る目的を明確にされ、次のように詩っています。

わたしの詩
わたしの詩は
生きるために苦しみ
生きるために泣き
生きるためにさげすまれ
はずかしめられても
なお生きようとする
そういう人たちにささげる
わたしの願いのかたまりであり、湧き水である（22p)

真民先生は詩を通して、悩める人々を、励まし救いたい、との使命感に燃えた人でした。

⑷詩の紹介　　2例

２頁の二つの詩を読んでみます。

「つみかさね」と「うしろを向かないで」を読み上げる

つみかさね」は高校野球に感動して作られたものです。

後ろを向かないで」は若いサラリーマンに向かっての詩です。

幅広い詩を一万以上作られました。その中から今日は真民三大詩をご一緒に学びます。

２，三大真民詩を学ぶ

⑴次に真民先生３大詩を紹介します。

資料４ページの鳥の図をご覧ください

真民先生は酉年生まれでご自分をよく鳥に例えて話されまた。

『鳥の体にあたることばとして「念すれば花ひらく」、

鳥の右の翼にあたることばとして「二度とない人生だから」、

鳥の左の翼にあたることばとして「めぐりあいのふしぎ」

「三つのことばをしっかりと体につけて、

人生を飛んで参りました。

墜落しそうなとき、

もう駄目だと思うとき、

飛ぶ力がなくなりそうになったとき、

行き先に望みがなくなろうとしたとき、

いつもこの三つのことばに励まされ支えられて、

人生という大きな果てしない空を飛んでまいりました。

わたしは自分を今日まで支えて詩を作らせ、

この世に生かしてきた根本のものとして、

三つのことを体につけております』　とよく言われました。

⑵続いて、胴体となっている「念ずれば花ひらく」詩の読みます。
全文を読み上げる「念ずれば花ひらく」

苦しいとき/母がいつも口にしていた
このことばを/わたしもいつのころからか
となえるようになった/そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ/ひらいていった

この言葉はお母さんの言葉と仰っています。
ここがこの詩の大きなポイントです。

⑶左の翼にあたる「めぐりあいのふしぎ」です。次の頁です。

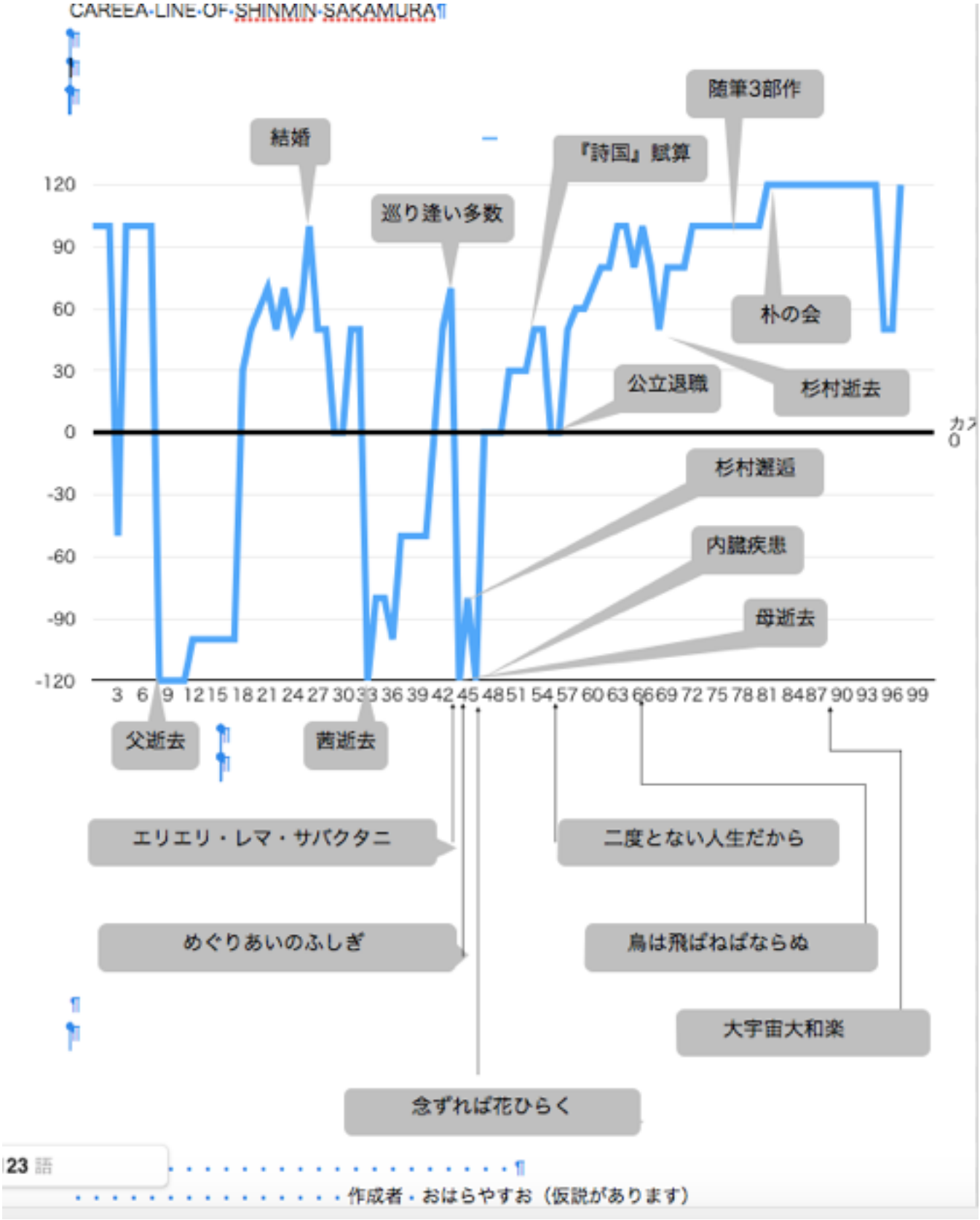
「人生は深い縁の、不思議な出会いだ。世尊の説かれた輪廻の不思議、その不思議が今のわたしを生かしてゆ

く－－－全文を読む－－－－－－－－－－－－

大文字のところだけ紹介される有名な詩ですが
右側を読みますと
「目の見えない人たちとの不思議なめぐりあいが、力になる」と
目が見えなくなっていく不安が歌われています。
然し、最後は「めぐりあいのふしぎに、手を合わせよう」と
感謝になっているところに注目してください。
B後ほどお話します。

3，新しいレジメに作成真民先生のキャリア・ライン

レジメのグラフを見て下さい。



この表はわたしが作った真民先生のキャリア・ラインです。
私は先生の晩年の20年間を経理顧問として仕えしてきました。
その直接に触れた経験から、先生の人生の喜怒哀楽の時々を線で現しました。いろんな事が沢山はいっていますが
中央の横軸は年齢、明治42年生まれ、97年の人生、明治、大正、昭和、平成と日本の4世代を生きぬいてこられた方です。
縦軸は喜怒哀楽線、太い線は苦難突破線とわたしは読んでいます。
グラフの左端、人は生まれた時は100%の喜びと祝福で生まれます。
グラフの右端は天国に行くときです。真民先生は120%で逝かれたと私は考えています。人生には山・坂・谷が何度もありますから折れ線グラフにしました。
⑴真民先生には３回の大きな艱難・苦難の時があります。グラフで谷になっています。①父逝去、②茜逝去、③母逝去
後半は実に豊かな美しい花が咲いた幸せな人生でした。
このグラフを見て私は先生の人生を「苦悩を突き抜け歓喜に至る」と題名をつけました。
それはベートーヴェンの生涯をロマン・ロランが命名したことからヒントを得たものです。

「めぐりあいのふしぎ」と「念ずれば花ひらく」は３番目の谷で出来た詩です。
「二度とない人生だから」は５６歳で苦悩を突破した後の上昇過程にありますが「公立退職」記したように谷になっています。
三つの詩はいずれも谷間になっているところで出来ています。

これらの三つの代表作は最初の苦難に関連しますので最初の「どん底」についてお話します。

⑵　8歳から始まる最初の「どん底」

最初の「どん底」は8歳の時、お父さんが急死されます。
当時お父さまは校長先生であり、村のリーダー的な存在でした。
豊かな家庭でした。42歳を前にして病気で亡くなり、全ては急変します。
お母さんは36歳、11歳を頭に5人の子どもを育てることになりました。そのときの様子です。
「母の母が来て、下の２人の子を連れて帰ってきなさい。上の３人は奉公にだすか、どこかに預けなさい」と徹夜で談判します。然し、お母さんは夜中の12時になっても「ウンと」言わず深夜2時になっても「ウンと」言いません。
子ども達は隣の部屋からふすま越しに見ていました。
異様な雰囲気です。
真民先生は自分は奉公に出されると覚悟したそうです。
然し、お母さんはそれを聞き入れず、5人の子どもを連れて
お父さんの郷里に帰ることになりました。
そこは坂ばかりの山村で、借りた家は一家6人が寝るところもないほど狭い、雨漏りする暗い家でした。
真民先生は長男だったため、お母さんと苦労を共にして、履くものも自分で作り、他人の草履も作り、荒れ果てた土地を開墾して芋やそばを作りました。
生きるためにお母さんの内職を手伝う生活が始まったのです。
自分が作った草履を履いて谷間の学校に通わねば成りませんでした。
体の小さかったこと、体が弱かったことにコンプレックスを持っていました。
更に先生は「コンプレックスはまだあった。書道、絵画、音楽コンプレックスがわたしを苦しめた。初めから貧乏であったらコンプレックスも起きなかったであろうが、校長の子として育てられたので、一瞬にして其れが崩れ去った。」と言われました。
学校では相当いじめられ、差別を受けられたと想像します。
そんな状況にあっても

お母様は長男の真民先生をよくお寺につれて行きました。
信仰深かったのです。
真民先生には、お父さんの「水晶のように美しいのど仏」の供養を命じられ、その為、真民先生は毎日誰よりも朝早く共同井戸に水を汲みに行かなければなりませんでした。
後年になって、その頃のお母さんの姿を詩たった詩があります。
「母上よ、あなたほど不運な重しを背負ってきた人は　あまりいないような気がします。
あなたは、ありがたいことだ、勿体ないことだ。みんな仏さまのおかげだといわれますが、あなたほどの才能と意志とを持つ女性が、草深い田舎で枯れ木のように、老いてゆかれるのを思う
と、ーーーー」という詩です。
お母様は苦難の中にあっても、ぐちひと言わず、他人をせめず、泣き言を言わず、ただひたすら、もぐもぐとお経のようなのもを唱えておられたのです
真民先生はこのお母様のもぐもぐ唱える言葉がどんなお経の中にあるのか気に掛かっていましたが、日々の目まぐるしい現実の中で調べる余裕はありませんでした。

⑶楽しくなかった中学校

多くの人は（今の中学校）に進むのですが、お母さんは上の学校に行かせてくれました。これは、旧制中学といいます。５年制で今の中高一貫教育に相当します。先生は仰いました
「学校は面白くもなく、友達もなかった。孤独な明け暮れをした。
通学距離が往復１２㎞あった。
野の花のタンポポ、野の草の強さ美しさを知り、
木や草や鳥たちと心を通わせ、それがやがてわたしの
骨格となり、細胞となり、血液となり、魂となっていった。
酉年生まれのわたしは鳥たちの自由な世界に接近していった。あの異常な孤独が思われてならない」

友達はなく、差別といじめに耐えての日々だったと想像します。
晩年になっても「差別」に憤りと嫌悪感を露わにされました。
後年「タンポポ魂」という詩を作ります。7頁にあります。
踏みにじられても　食いちぎられても　死にもしない
枯れもしない　その根強さ　そしてつねに　太陽に向って咲く
その明るさ　わたしはそれを　わたしの魂とする

この詩を見ても、真民先生の詩は逆境にあっても必ず光を仰ぎみています。「苦難を突き抜け歓喜に至る」ベートーヴェンのようなしなやかな強靱性と上昇志向があります。
中学生（今の皆さんと同じ高校2年生）迄に受けたと思われる激しい差別や嫌がらせの体験から、世の中の差別に生涯、憤りを感じられました。戦争にも嫌悪感をもっておられました。

⑷更に苦学をして今の大学を卒業し、学校の先生になって郷里熊本で3年間教えた後、昭和９年、新天地を求めて25歳で朝鮮の学校に転任します。翌年結婚式のために少し帰国しますが1945年11月まで11年間朝鮮で教師を務めます。
⑸第二のどん底が1941年3月です。
一番最初の子どもさんが生まれるのですが、すぐに亡くなります。（生即死）
結婚して6年目、諦めていた子が誕生するというので、もう生まれる前から、喜びの準備がはじまっています。
然し、一瞬にして喜びは深い谷底に突き落とされました。
茜さんと名づけられますが、その顔を見られたのはお母さんと産婆さんだけで、真民先生は全身包帯をし、冷たくなったわが子と一晩一緒に寝ます。「爪がきれいだった」とよく言われました。
この逆境から立ち直るのは容易ではありませんでした。

教え子たちが町で一番美しい人形を買ってきてくれ慰めてくれます。
実はこの人形が真民先生が1945年11月日本に引き揚げてくる苦しい状況を助けるという奇跡物語がありますが、
今日は時間がありません。略解１にあります

４，短歌を止め詩に転向する

「41歳の一大事から」第3のどん底へ、

⑴個人誌「ペルソナ」を毎年作る

朝鮮から引き揚げてすぐに四国愛媛県の高等学校に勤めます
お父さんが亡くなった年齢近くの41歳になり、ご自分をお父さんと比べるのです。校長先生をして、村のリーダーだったお父さんに比べて、「自分はなんとみじめか」と自戒するのです。
そして、「何かをしなければ」と考えて、２３年間続けていた短歌をや止め、詩に転向します。
真実を求める自分の思いは31文字の型にはまったものでは表現できない。うなされるような情熱が湧いてきたのです。
そして、両親への大恩に報いるために「ペルソナ」という個人誌を毎年一冊発行すると決意するのです。
①最初の詩を紹介します　41歳の時のものです

狭くとも　一すじであれ　どこまでも　ほりさげてゆけ
いつも澄んで　天の一角を　見つめる
貧しくとも　心はつねに高貴であれ
一輪の花にも　季節の心を知り、
一片の雲にも　無辺の詩を抱き
一碗の米にも　労苦の恩を感じよう
いじけるな　あるがままに　おのれの道を
素直に　一途に、歩け

②六魚庵独語もう一つ詩の最後で有名な部分を読みます
よい本を読め、よい本によって己を作れ、心に美しい火を燃やし、人生は尊かったと叫ばしめよ」もう一度読みます

よい本を読め、よい本によって己を作れ、心に美しい火を燃やし、
人生は尊かったと叫ばしめよ」人生は尊かったと叫ばしめよ」
凄いです。ご自分に言い聞かせているのです。

⑵八木重吉詩集にめぐりあう　　略解２

このような詩を作り始めて間もなく、
第一の人生の師となる「八木重吉詩集」に出会うのです。
師、（先生ですね）は人ではなく、本でした。
詳しくは９頁に書きましたが
「もしこの詩集にめぐりあわなかったら、わたしは今日どうなっているであろうか。慄然とするものがある。」というほどの衝撃を受けるのです。邂逅(かいこう)的な出会いです。邂逅についてはレジメを見て下さい（見る時間要）
邂逅とは、単なる出会いではなく、求めていた者が、呼びかけに応える出会いです。そして目がひらくといいましょうか覚醒する出会いで、今までの人生の路線とは異なる新しい道が開かれる出会いです。詩風が変わるのです。

42歳の時の「ねがい」と題する詩があります。

人生を愛するが故に詩を愛する
わたしの詩もそこから生まれなくてはならない
悲しみが喜びとなり、一人の嘆きが、万人の救いいとなり
ひとりの喜びが、万人の力となり
水のように清められ、雲のように高められ
虹のように美しくならなければならない
わたしの詩もそこまでゆかなくてはならない
幼子のように詩神の前に　ひざまずきたい

八木重吉詩集に出会って万人の救いとなる詩を作る」と宣言するのです。

どんな詩を作りたいのか、どんな詩人になりたいのかが宣言されているます。凄い予言的なもの。自己の行き着くところをイメージしています。目的がはっきりしたのです。この八木重吉詩集の影響はとても大きいのです。（真民を真民たらしめたと私は思う）

その目的の為には今の自分では駄目だ。修行が必要だと思うのです。そこで
⑶厳しい修行を始めますが、第3のどん底に入るのです。
激しい自己改革をしなければならないと思ったのです。
大乗寺という自宅の近くのお寺で坐禅をしたり、猛烈に本を読んだのです
そして、ずーっと以前から気になっていたお母さんの念仏に似た言葉に出会うのです。
「疑えば花ひらかず、信心清浄なれば花ひらいて仏をみたてまつる」

この言葉を書いた著者を岐阜県の山奥まで訪ねて、教えを乞うのですが、その人は「わしゃ、知らん」と素っ気ない一言でした。真民先生は「もうこれは自分で調べるほかにはない。人を頼ってはならない」と決意し、更に激しい修行のような読書をします。そして大きなお経の本「大蔵経といいます」にあるかも知れないと考え、海のように広くて、深いこの教典を読み始めます。「大蔵経」は百科事典に匹敵する膨大なお経の全集です。一回読み通すのに1年はかかると私は思います。一度目、二度目では発見できず、自分の能力に限界を感じ大スランプに陥ります。
その時の詩です。少し長いですが、非常に重要な詩です。9頁です

「詩に生きよ　詩に生きよ　それよりほかに
我れの生きゆく道なし
生きることや難し　生きることや苦し

子を抱いて　夕暮れの道を帰る
子と仰ぐ　夕焼けの雲よ　涙ぐましいまでの愛情よ。

死のうと思う日はないが
生きてゆく力がなくなることがある
そんなとき大乗寺を訪ね
わたしはひとり
仏陀の前に坐ってくる
力わき明日を思うこころが
出てくるまで坐ってくる
年をとれば故郷が恋しくなるという　その故郷をわたしはまだ知らない
ああ一度でもいい　わたしは生まれた処の土を嗅ぎたい
その時淋しい風がふいていようとも　わたしはそれを笛の音のように聴くであろう
エリ・エリ・レマ・サバクタニ（主よ、主よ、なぜ、わたしをおみすてになるのですか）
イエスよ　あぁ、あなたの最後のこえが　今日もきこえる」

これは最後のあがきのような祈りの詩です。大スランプです
⑷杉村春苔尼とのめぐりあい
大蔵経を熟読し、坐禅をする修行で真民先生の肉体が弱ります
その過程を示す詩があります
「からだをもみながら/妻が言う/
めっきりこの一年痩せられましたよ/
歯のせいばかりでもないでしょう/
坐ってばかりいなさるからでしょうか/

頬の肉がおち/肩の肉がとれ/股の肉がなくなったことが/
わたしにもはっきりわかる・

でもわたしの嘆きを妻に言ったとて/
分かってもらえようか
わたしはわたしの肉をさき/骨をけずっても/
かなえていただこうと思っている/ひとつの願いがある」

ひとつの願いがある」とはお母様が唱えていた「念ずれば花ひらく」の出典を探し出すことです。
そんなとき、前年から文通して励ましを受けていた杉村春苔さんを別府に訪ねるのです。めぐりあう為に。
お会いしてそのお顔の、慈愛に溢れた輝きに接し、仏様に会ったような喜びを感じるのです。真民先生は大邂逅だと仰っています。「わたしは杉村先生を通して菩薩とつながり、仏とつながり、永遠なるものとつながる自己を知った。この人との邂逅は自分にとって大回心であった。この一期一会によってわたしの一切が変わった。新しい人生が開始されたと言ってもよいであろう」
この邂逅を「めぐりあいのふしぎ」という詩にしたのです。
この頃の真民先生は心のスランプだけでなく、体も相当に弱り、
４４歳の体は健康に不安を覚え、3人の幼子を抱えた生活は不安なの唯中にあったのです。
もう一度5頁に戻り、右のところを読むとその状況が分かりますね。

「目の見えない人たちとの、不思議なめぐり会いが、この頃の私に限りない喜びを与える。目の見えない人たちとの、暖かい交わりが、今の私に、ひとすじの光を与える」

注目すべきは、目が見えなくなっていくという
そんな逆境にあっても、最後は
めぐりあいのふしぎに/手を合わせよう。と言い、
明るい詩を作っておられるところです。

「暗いものが明るいもの」にまだなっていないような状況ときにも、明るくなると言っている。信じている。断定している、イメージしているのです。ここが真民詩の凄いところです。これは一貫しています。真民詩の特徴です

⑸厳しい修行で半盲になる

探し出したいのは「念ずれば花ひらく」という母の念仏の出典です。それに近い言葉である「疑えば花ひらかず、信心清浄なれば花ひらいて仏をみたてまつる」を探すために、」大蔵経」に3度目の挑戦をします。今度は一語一語、指で押さえて読んだのですが見つかりませんでした。

目の病気はどんどん進行し半盲状態のあるとき、杉村春苔先生が手に目薬瓶を持った若い観音様の絵を描いて送ってくださった。その直後に、あの言葉は、大蔵経本体ではなく、解説書にあると閃いて、それを開けます。すぐに見つかりました。

ここは「ヤッター」という達成感ですね。

然し「念ずれば花ひらく」の言葉は遂に発見できませんでした。

ここで真民先生は大決断をします。

これは「やっぱり母の言葉だったのだ」と、ここで真民先生は安堵感と達成感を味わったとわたしは思うのです。

病の中にあってもぎりぎりの限界まで自分の思いに力を尽くし到達した今、もうグラグラせず、フラフラせず、クヨクヨせずこの言葉は母のことばの真言として唱えようと決心して生まれた詩が「念ずれば花ひらく」です。

レジメにも書きましたが

「念ずるというのは前向きに生きようとすることであって、希望なのである。どん底に落ちても、念じながら這い上がってくる不屈の魂である」と言われました。まさに命がけです。

「命がけ」という詩も作りました。
命がけという言葉は
めったに使っても、言っても　いけないけれど
究極は命がけでやったものだけが　残ってゆくだろう
疑えば花ひらかず　信心清浄なれば　花ひらいて仏を見たてまつる
この深海の真珠のような
ことばを探すため
わたしは命を懸けたといっても　過言ではない
人間一生のうち　一度でもいい　命を懸けてやる体験を持とう

こうして生まれたのが「念ずれば花ひらく」です。

⑹然し、先生の病は内臓に及び３人の医師から開腹手術を勧められます。然しここでも不思議な出会いがあり、第３の恩師である利根白泉という隠者のような人にであって手術することなく、奇跡的に回復します。その様子は資料の17頁にあります。後ほどみてください。

５，突破、ブレイクスルー

⑴一遍上人の生誕地を訪問

その後元気になられた先生は行動を始めます。50歳です
まず、一遍上人の生誕地、道後温泉の裏にある宝厳寺を訪ね、
一遍上人の修行姿に感動します。
一遍上人は念仏を唱えることで６０万人の貧しい人を救おうとしました。６０万人「決定往生」と言いますが、そのために念仏を配りながら全国を歩きました。皆さんが歴史で学んだ通りです。
一遍上人は251,724人札を配ったそうです。残りの348,276人を真民先生は自分の詩（うた）を配って一遍上人の後を引き継ごうと考えました。凄いことを考えますね。
然しその気の遠くなるような遠大な計画を前にして躊躇します。
そこで、更に行動します。

⑵森信三先生との邂逅
予てから「人生二度なし」と言っておられた森信三先生を３度訪ねます。３度目の訪問の時、
森先生が何か困っていることがありますか？
と尋ねられました真民先生は「朝鮮のある人の住所が分からず困っています」と答えると森先生は食事の箸をおかれ鞄から名簿を取り出しメモをして、この人に尋ねればきっと分かるでしょう」と即断即行してくれました。
これを見た真民先生は、これだ！即行だ！「今ここで決めることだ」と天の声に促されるように一遍上人の後を継ぐ決断をして、月間誌『詩国』の刊行を決意し実行します。『詩国』のことについて資料の１３頁を見てください、下段⑶に『詩国』とありますね。そういう文字です。
詳しくはそのとこを後で読んで下さい。
⑶『詩国』の誕生　　一遍＋森信三先生
又しても師との出会いによる生き方の転換です。53歳でした。昭和37年7月、第1号が誕生します。この『詩国』は切手代のみで無料で希望者に郵送されます。最高1800人になったと言われます。宛名書き、フゥーと息を吹きかけて封筒を開き、詰める、切手貼り、郵便局へ、これを毎月奥様となさいました。
あるとき私が切手貼りは大変ですから「郵便局に任されてはいかがですか？」と申し上げましたら、
「これがわたしの修行です」と。激しくお叱りを受けました。
『詩国』は95歳、500号迄一月も欠かすこと亡く続きました。

⑷いよいよ「二度とない人生だから」です。
56歳、公立高校の退職という不安で不安定な時に生まれてのが「二度とない人生だから」です。凄いですね。
逆境の中で世界に響き渡る詩が生まれているのです。
この詩は教科書にも載りました。

さて、
６，3大詩に共通することは
①逆境の闇の中にあっても希望の光を見ていることです
「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」の地下水が流れています
そのためのキーワードが「念ずれば花ひらく」です。
②二つ目の共通点は「人生の恩師」を求めて行動していることです。
そして素直に恩師の教えを実行していることです。
若いときに人生の恩師に巡り逢うことは大切です。終生の恩師に巡り会うことで人生が変わります

７，その後真民先生は有名になられます。後で年譜を見てください。

66歳の時には「鳥は飛ばねばならぬ」の詩が完成します。
この詩は今年の卒業生に江崎真弓先生が全文紹介して贈ってくださっています。
８，後を継ぐ者達の動き
この真民先生の詩を後世に長く遺したいという人々が多く現れ、
最も長く残ると言われる方法、即ち「石に刻む」という運動に発展して多くの碑が誕生することになりました。
７３７の碑が世界中にあります。一人の詩人の碑がこんなに存在するのは他にありません。
奇跡のようなことです。
海外にある36の碑の一覧表が18頁にあります。

９，私個人の話しを最後にさせてください。
1990年1月、真民詩を学び広める会「朴の会」が各地でました。
私は神奈川県西部ですので湘南・箱根朴の会を作りました。
会員に優秀な方が多く、真民詩を世界に広めようと詩の英訳や出版活動に発展し英文対訳「鳥は飛ばねばならぬ」が出版されるにいたりました。

更に私は「念ずれば花ひらく」の碑をイスラエルに建てようと決断して第303番碑を真民先生にお願いして書いて頂き、英語とヘブライ語の3種の言葉で彫刻してヘブライ大学の植物園に1994年建立しました。「世界の平和はイスラエルから出る」との古い預言を信じてのことです。
その後1999年7月、第505番碑を筑後市高江75—2の息子の自宅に就農記念にたてました。家庭の事情で息子は、宝塚に住むことになったため、2002年6月この碑は筑後市立病院に移設されました。今回の移設は私の大恩人と迎えてくださった八女高等学校の皆さんのお力によるものです。感謝一杯です。この碑には坂村真民先生が額をつけて祈願してくださったものです。
まとめに入ります
１０，真民先生が願ったこと
それは
①「露草の露にもめぐり会いの不思議を感じる感性を養うこと」
②「一番身近な者たちにできるだけのことをしよう」
③「返事は必ず書くことにしよう」という身近なことから
④「許し合いましょう」との人間関係に広がり、更に世界に向かって
⑤「平和を築きましょう。一致に向かいましょう」と呼びかけ
　どんなにちがったものでも
　どこかで一致するものがある
　それを見出し　お互い手を握り合うことだ。
　一致こそわが願い　平和こそわが祈り
　友よ　この悲願を　広めてゆこう　手をとりあって
　この道を　進んでゆこう
⑥そして、若者よ、大志を抱け、求めよ、求めよ、
　あなたの使命を、そして自分の花を咲かせよ
こんな願いが第505番碑にこめられています
１１，第505番碑への想い

露草の露という小さい儚い命を持つものから、世界平和という
大きく、広く、深い、祈りを脈脈と受け継ぐ第505番碑です。

「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」「若者よ、大志を抱け」
「悩む者、我に来たれ」「求めよ、さらば与えられん」
「Pray,and any flower of yours will come out」
と第303番碑につながる碑です。

これから世界は世紀の大変動の時代になります。
若い人には変化はチャンスです。
どんなことが起きようとも勇猛果敢に突き進んでください。
一度きりの人生です。
達成感の喜びも一杯あります。
スランプも何度も経験することでしょう。
この第505番碑は誰にも語れない悩みがあるときの「助けの石」
（エベン・エゼル）となります。そんなときには額をつけて悩みを語ってください。
1000年先を見つめる第505「念ずれば花ひらく」碑は
「皆さんと共に『未来を切り開く』精神を語り続ける石です
そして忘れないでください。
真民詩という川の流れにはいつも「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」との声があります。
「念ずるというのは前向きに生きようとすることであって、希望なのである。どん底に落ちても、念じながら這い上がってくる不屈の魂である」ことを心に留めて頂きたいのです。

23頁の「鳥は飛ばねばならぬ」を読みます。
続いて最後に皆さんとご一緒に30頁の「生きることは」を唱和して終わります。

鳥は飛ばねばならぬ
鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ
怒濤の海を
飛びゆく鳥のように
混沌の世を生きねばならぬ
鳥は本能的に
暗黒を突破すれば
光明の島に着くことを知っている
そのように人も
一寸先は闇ではなく
光であることを知らねばならぬ

新しい年を迎えた日の朝
わたしに与えられた命題
鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ

30頁を開けてください。一緒に唱和しましょう
　　生きることは
生きることは　自分の花を咲かせること　風雪に耐え寒暑に耐え
だれのものでもない　自分の花を咲かせよう
生きることは　神仏の使命を果たすこと　生まれてきた者には
必ず何かの使命がある　それを見出して成し遂げよう
生きることは　光を見出すこと　この世は決して闇ではなく
必ず光が射してくる　そのことを信じ　勇気を出してゆこう
生きることは　愛に目覚めること　人を愛し世を愛し万物を愛し
二度とない人生を　愛の心で包んでゆこう
生きることは有り難いこと　生かされて生きる不思議を知り
すべてに感謝し　手を合わせてゆこう

クロージング

読んで頂きましたように、生きることは
自分の花を咲かせること
だれのものでもない
自分の花を咲かせることです。
「念ずれば花ひらく」の英訳は
「Pray,and any flower of yours will come out」です。
anyはご存知のように単数形で「どんな人にも、それぞれの個人、ひとりの例外なく」を指します。
come out、実現する。そのためにPray,祈ることです
生まれてきた者には　必ず何かの使命がある
それを見出して成し遂げる
光を見出すこと　この世は決して闇ではなく　必ず光が射してくる
愛に目覚めること　人を愛し世を愛し万物を愛し
すべてに感謝し　手を合わせてゆくことです。
そのために
大切なのは、今です。一呼吸、一呼吸の今を、大切に
大いなる目的に向かって進んでください。
皆さんの健康と大躍進を祈り、私の話を終わります

「二度とない人生だから」
全文碑のある保育園
毎日手話でこの詩の全文を全員で唱和しています。園庭に幼児と共にあるこの碑は幼子の魂に深く根づくでしょう。
園歌も真民先生が作詩されています。

レジメのkey ward　　これは講演前に生徒さんに渡したものです

⑴最初の詩　41歳

狭くとも　一すじであれ　どこまでも　ほりさげて
　　ゆけ　いつも澄んで　天の一角を　見つめる
貧しくとも　心はつねに高貴であれ　一輪の花にも
　　季節の心を知り、　一片の雲にも　無辺の詩を抱き
　　一碗の米にも　労苦の恩を感じよう
いじけるな　あるがままに　おのれの道を
　　素直に　一途に、歩け

⑵よい本を読め、よい本によって己を作れ、心に美しい火を燃やし、人生は尊かったと叫ばしめよ」

⑶人生を愛するが故に詩を愛する
わたしの詩もそこから生まれなくてはならない
悲しみが喜びとなり、一人の嘆きが、万人の救いいとなり
ひとりの喜びが、万人の力となり
水のように清められ、雲のように高められ
虹のように美しくならなければならない
の詩もそこまでゆかなくてはならない
幼子のように詩神の前に　ひざまずきたい

⑷「疑えば花ひらかず、信心清浄なれば花ひらいて仏をみたてまつる」

⑸命がけという言葉は
めったに使っても、言っても　いけないけれど
究極は命がけでやったものだけが　残ってゆくだろう
　疑えば花ひらかず　信心清浄なれば　花ひらいて
　仏を見たてまつる　この深海の真珠のような

ことばを探すため
わたしは命を懸けたといっても　過言ではない
人間一生のうち　一度でもいい　命を懸けてやる体験を持とう

⑹3大詩に共通することは
①逆境の闇の中にあっても希望の光を確信していること。
「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」の地下水が流れています
そのためのキーワードが「念ずれば花ひらく」です。
②二つ目の共通点は「人生の恩師」を求めて行動していることです。そして素直に恩師の教えを実行していることです。
若いときに人生の恩師に巡り逢うことは大切です。終生の恩師に巡り会うことで人生が変わります

⑺真民先生が願ったこと
それは
①「露草の露にもめぐり会いの不思議を感じる感性を養うこと」②「一番身近な者たちにできるだけのことをしよう」
③「返事は必ず書くことにしよう」という身近なことから
④「許し合いましょう」との人間関係に広がり、更に世界に向かって
⑤「平和を築きましょう。一致に向かいましょう」と呼びかけ
　どんなにちがったものでも
　どこかで一致するものがある
　それを見出し　お互い手を握り合うことだ。
　一致こそわが願い　平和こそわが祈り
　友よ　この悲願を　広めてゆこう　手をとりあって
　この道を　進んでゆこう
⑥そして、若者よ、大志を抱け、求めよ、求めよ、
　あなたの使命を、そして自分の花を咲かせよ
こんな願いが第505番碑にもこめられています
⑻露草の露という小さい儚い命を持つものから、世界平和という大きく広く深い祈りを脈脈と受け継ぐ第505番碑です。
「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」「若者よ、大志を抱け」

「悩む者、我に来たれ」「求めよ、さらば与えられん」
「Pray,and any flower of yours will come out」
と第303番碑につながる碑です。
「念ずれば花ひらく」の英訳は
「Pray,and any flower of yours will come out」です。
anyはご存知のように単数形で「どんな人にも、それぞれの個人、ひとりの例外なく」を指します。
come out、実現する。そのためにPray,祈ることです
生まれてきた者には　必ず何かの使命がある
それを見出して成し遂げる
光を見出すこと　この世は決して闇ではなく　必ず光が射してくる
愛に目覚めること　人を愛し世を愛し万物を愛し
すべてに感謝し　手を合わせてゆくことです。
そのために
大切なのは、今です。一呼吸、一呼吸の今を、大切に
大いなる目的に向かって進んでください。
皆さんの健康と大躍進を祈り、私の話を終わります
ご静聴有難うございます

平成28年度・養志特別講座

未来を切り開く
「念ずれば花ひらく」
第505番碑

平成29年2月21日

福岡県立八女高等学校

本日はお招きいただき誠にありがとうございます。
学年末試験が終わりホットされ早くご自分の時間を持ちたいと思っておられる皆さんを前にして大きな責任を感じております。人生で一番大切なもの、それは「時間」だとわたしは思っております。精一杯「未来を切り開くことば」を語らせていただきます。又、この得がたい機会をつくって下さいました校長先生始め多くの先生方に深く感謝を申し上げます。この教壇に立てますのは資格のある教職の先生方と教育に貢献しておられる有名な方のみであることをわたしはよく知っておりますこの無名なわたしに「ここに立つ」お許しをいただきましたことの有難きことを心しております。
本当にありがとうございます。　　平成29年2月21日

元湘南・箱根朴(ほう)の会
世話人代表・小原靖夫(おはらやすお)
ohara.yasuo@gmail.com
http://bestopia.jp

講演レジメ　　25頁から30頁は私が作成しました真民先生個人歴です

０１，感謝と追悼　　3頁全員で朗読お願いします。
０２，坂村真民先生の三大詩の紹介　　4-5頁参照
　　どん底から生まれた三大詩
０３，坂村真民先生の人生脚本　　6頁
　「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」＝「念ずれば花ひらく」
０４，終生の師との不思議なめぐりあい　　師を求めて即行実践
０５，少年よ大志を抱け　　達成感が人を生かす　　人生最初の達成感？　　二度目は？
０６，達成感が目標を導く杖。目標がないと達成感も味わえない
０７，成功とは「　　」
０８，失敗もある。行き詰まりもある。その時に力になるもの＝師＝選択肢が増える
０９，失敗に直面、逃げない、使命感と出会うCHANCE
　　CHANCE
　　CHANGE　　二つの単語、どこが違うでしょうか？
１０，「念ずれば花ひらく」と私の体験
１１，生きることの基礎杭は高校生時代に打つ
　　師を求める、動く　５Sを実践する。５Sの原則と応用(企業編)
１２，未来を切り開く「念ずれば花ひらく」第505番碑が語りかけること

つみかさね
一球一球のつみかさね
一打一打のつみかさね
一歩一歩のつみかさね
一坐一坐のつみかさね
一作一作のつみかさね
一念一念のつみかさね

つみかさねの上に
咲く花
つみかさねの果てに
熟する実
それは美しく尊く
真の光を放つ

うしろを向かないで
うしろを向かないで　生きてゆこう
うしろにはいつも　いやな奴がいて
大きな手で　先へ進むのを　引っ張るのだ
あの手にかかると　仕事はいやになるし
すぐ妥協する弱い人間になってしまう
時計の針がいっときも休まず
前へ前へと進むように
夢を持って生きよう
うしろを向かない波や風
彼等はわたしの仲間　わたしの同士

鳥は飛ばねばならぬ　　Birds must fly
人は生きねばならぬ　　We must fly

未来を切り開くことば。「念ずれば花ひらく」

今日のご縁をつくっていただいた忘れてはならない先生がおられます。昨年9月18日に逝去されました平川千万彦先生です。先生を偲び、皆さんで「二度とない人生だから」を朗読したいと思います。

二度とない人生だから

①二度とない人生だから
一輪の花にも
無限の愛を
そそいでゆこう
一羽の鳥の声にも
無心の耳を
かたむけてゆこう

②二度とない人生だから
一匹のこおろぎでも
ふみころさないように
こころしてゆこう
どんなにか
よろこぶことだろう

③二度とない人生だから
一ぺんでも多く
便りをしよう
返事は必ず
書くことにしよう

④二度とない人生だから
まず一番身近な者たちに
できるだけのことをしよう
貧しいけれど
こころ豊に接してゆこう

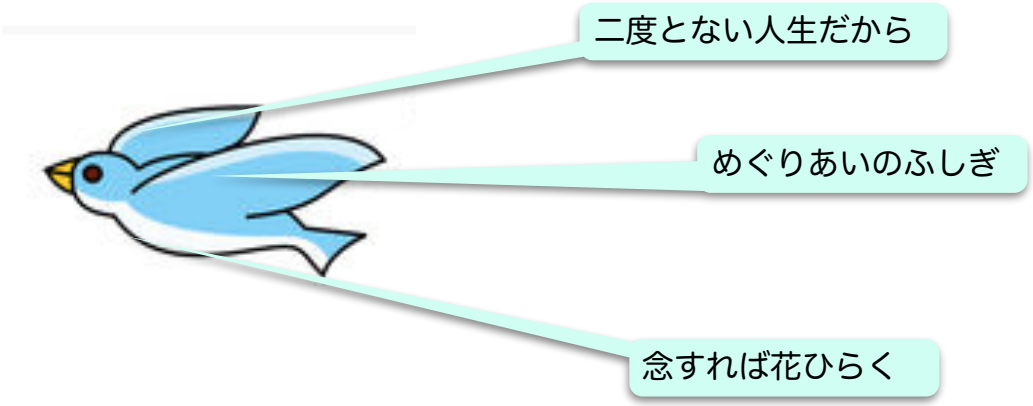
⑤二度とない人生だから
つゆくさのつゆにも
めぐりあいのふしぎを思い
足をとどめてみつめてゆこう

⑥二度とない人生だから
のぼる日しずむ日
まるい月かけてゆく月
四季それぞれの
星々の光にふれて
わがこころを
あらいきよめてゆこう

⑦二度とない人生だから
戦争のない世の
実現に努力し
そういう詩(うた)を
一篇でも多く
作ってゆこう
わたしが死んだら
あとをついでくれる
若い人たちのために
この大願を
書きつづけてゆこう

7節からできていますが原文には番号はふってありません。
皆さんは、今どの節に一番心が惹かれますか？　　来年又読み返してみてください。

ご自分がどの節に心惹かれるか？毎年繰り返して読んでください。詩や絵画、音楽などの芸術は同じ作品でも観る人の環境や心の状況で変わったメッセージを発します。
この詩の作者が坂村真民先生です。わたしは２０年間先生の経理顧問をさせて頂きました。
真民先生は酉年生まれでご自分を、よく鳥に例えて話されました。
『**鳥の体**にあたることばとして**「念すれば花ひらく」**、
鳥の右の翼にあたることばとして**「二度とない人生だから」**、
鳥の左の翼にあたることばとして**「めぐりあいのふしぎ」**　　「三つのことばをしっかりと体につけて、人生を飛んで参りました。墜落しそうなとき、もう駄目だと思うとき、飛ぶ力がなくなりそうになったとき、行き先に望みがなくなろうとしたとき、いつもこの三つのことばに励まされ支えられて、人生という大きな果てしない空を飛んでまいりました。わたしは自分を今日まで支えて詩を作らせ、この世に生かしてきた根本のものとして、三つのことを体につけております』



念ずれば花ひらく
苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

左の翼としている「めぐりあいのふしぎ」の詩です。この詩は大文字のところが単独で引用されることが多いです

人生は深い縁(えにし)の
不思議な出会いだ

世尊の説かれた輪廻の不思議
その不思議が今のわたしを生かしてゆく

大いなる一人の人とのめぐりあいが

「念ずれば花ひらく」の全文をご紹介しましょう

わたしをすっかり変えてしまった
暗いものが明るいものとなり
信じられなかったものが
信じられるようになり
何もかもがわたしに呼びかけ
わたしとつながりを持つ
親しい存在となった

子を抱いていると
ゆく末のことが案じられる
よい人にめぐりあってくれと
おのずから涙がにじんでくる

めのみえない人たちとの
ふしぎなめぐりあいが
このごろのわたしに
かぎりないちからをあたえる
手をにぎりあって喜びあう
めのみえない人たちとの
あたたかい交わりが
いまのわたしに
ひとすじのひかりをあたえる

めぐりあいのふしぎに
てをあわせよう

三つの詩がいつ生まれたのかは私の仮説ですが、「めぐりあいのふしぎ」は1953年（44歳）「念ずれば花ひらく」は1955年（46歳）、「二度とない人生だから」は1965年（56歳）と考えられます。（詳細は間もなく先生の伝記が出版されますのでその時には明らかになるでしょう）
これらの詩は真民先生の個人歴を学びますと更に味わい深くなりますので少し年譜にそって話しをすすめさせていただきます。（年表を参照）（時間の関係で幼少期だけを詳しくみます）
真民先生のご生涯は1909年1月6日～2006年12月11日（97歳）で明治･大正･昭和･平成と日本の4世代を生きぬかれた人です。20世紀の殆どと21世紀にまたがる歴史の大変動の中を生きぬかれた人です。
65歳迄は学校の教師をされながら41歳迄は短歌をそれ以後は詩を作っていました。

１.幼児体験

3歳迄とか6歳迄の幼児体験は人生に大きな影響を与えます。7歳迄は豊かな家庭環境で育ちますが3歳の時にその地方を襲った赤痢にかかり避病舎に送られることになります。このとき「どうせ死んで焼かれるのだから、いい着物は着てゆかない」とお母さんを困らせました。3歳にして死に直面するのです。「青春時代に人間の命をみつめるものがわたしの心の中に大きく芽生えたのはこの経験であった」と言われました。

①母からの影響、まだ幼い私をおんぶした母が、田んぼのなかにある共同墓地に入って行き、乳が充分飲めずに死んでいった童子童女の墓石に念仏を称えながら白いあたたかい乳をしぼってかけておがんでいる母の姿ーーー母の慈愛・母の信仰　夢のような美しい思い出が多くあります
②父からの影響
「父は絵入りの古事記を買ってきてくれた。父は画報のようなものをとっていた。その中にドイツ兵の悲惨な姿が沢山載せられていた。今でも目をつむると負傷兵たちの惨状がありありと浮かんでくる。わたしが戦争嫌悪者となり、成長するにつれ、(戦争に）ある種の抵抗感を強く持つようになったのも、そのあまりにも痛ましい画報を見たからである」と記しておられます。
古典、和歌への憧憬、平和希求の芽が生まれる

２，最初の「どん底」は8歳

父の急死、当時お父さまは校長先生であり、村のリーダー的な存在でした。
9月父急逝（癌）、享年42歳を越えず。全ては急変、母の母が「下の２人の子を連れて帰ってきなさい。上の３人は奉公にだすか、どこかに預けなさい」としつこく主張しましたが母はそれを聞き入れず、父の郷里に帰ることになりました。母36歳、11歳を頭に5人の子どもを育てることになる。父の里村に移った一家6人が寝るところもないほど雨漏りする暗い家に移り住み、履くものも自分で作り、生きるために母の内職を手伝う生活が始まった。貧乏のどん底を体験.。
初めから貧乏であったらコンプレックスも起きなかったであろうが、校長の子として育てられたので、一瞬にして其れが崩れ去った。坂ばかりの山村に移り住んで、草履を作ることを習い、それを履いて谷間の小さな複式の学校にかよった。芋やそばを作った。他人の草履も作った。わたしは長男だったため母と苦労を共にしてきました。
母は長男のわたしをつれてよくお寺に参った。父の「水晶のように美しいのど仏」の供養に毎日共同井戸に誰も起きないうちに水を汲む日々。朝早く起きるのはこの時から習慣になっていった。体の小さかったこと、体が弱かったこともコンプレックスであった。コンプレックスはまだあった。書道、絵画。音楽コンプレックスがわたしを苦しめた。学校では相当いじめられ、差別を受けられたと想像します。

３，楽しくなかった中学校

旧制中学は5年、多くの人は小学校高等科2年に進むのですが、お母さんは上の学校に行かせてくれました。然し「県立玉名中学入学、山坂往復12㎞の道を通う。学校も山の上の狐や狸の出るような所にあり、学校は面白くもなく友もなかった。孤独な明け暮れをした。そんなことから野の花、野の草の強さ美しさを知り、木や草や鳥たちと心を通わせ、それがやがてわたしの骨格となり、細胞となり、血液となり、魂となっていった。酉年生まれのわたしが鳥たちの自由な世界に接近していった。あの異常な孤独が思われてならない。自然詩人的な性格が積もり積もった。差別といじめに耐えての日々だったと想像します。「差別」を嫌悪されていました。後年「タンポポ魂」という詩を作ります

踏みにじられても
食いちぎられても
死にもしない
枯れもしない
その根強さ
そしてつねに
太陽に向って咲く

その明るさ
わたしはそれを
わたしの魂とする

真民先生の詩は逆境にあっても必ず光を仰ぎみる。「苦難を突き抜け歓喜に至る」ベートーヴェンのようなしなやかな強靱性と上昇志向があります。

４，郷里を離れ皇學館へ（18歳）

皇學館は三重県の五十鈴川近くにありますが、日々の生活はその川と共にあり、「米をとぐにも、茶わんを洗うにも、湯をわかすにも、すべてこの川のお世話になった」その川の清らかさと波の織りなす静けさと激しさのとりこになります。
日本神道の学校に入って、１８歳から短歌を作り始めます。「短歌を作ることによって自分自身を開花結実させたい」と本気で決意するのです。（短歌と決別して詩人になるのは41歳です）これも幼児期に父から勧められた絵本に影響しています。聖書もこのころから読んでおられたと想像します。

５，初めての就職・学校・代用教員

皇學館を卒業して郷里の熊本に戻り3年間で二つの小学校に勤めますが、二つ目の小学校では5年生の男子学級を担任します。その中に障害をもつ児童が一人いました。全ての先生から無視されていた児童で、一言もしゃべらない。然し真民先生は放課後も補習して優しく話しかけ忍耐強く励まし、ついにその児童が「先生、おれ、けさ、めし喰った」と声を出すまでに成長したのです。これには全ての先生が奇跡のようだと驚いたそうです。この児童たちの卒業を待って、1934年（25歳）の真民先生は朝鮮の学校に転任されます。日本に戻られるのは1945年11月ですから12年間、今の韓国で教鞭をとられていました。

６，朝鮮時代（1934年~1945年）

⑴結婚式で僅かな帰国

この間の一時帰国は結婚式(26歳妻久代）だけ、抑圧された民の為に働きたいと使命感に燃えて転任します。当時、日本は朝鮮を植民地のように支配していましたから，学生の間からは常に独立運動の動きがあり、官憲の目が光り、多くの生徒が無実で拘束されるというのが日常的でした。真民先生は無実で拘束された生徒たちの身柄を引き取りに行き、抱きあって号泣することがしばしばありました。この時代に「差別」への憤りが「個人から世界」へ更に激しく先生の胸に抱かれたようです。弱い人たちへの優しさ、思いやりを常に持っておられました。又戦争に対する憤りもこの間に強化されます。

⑵第2のどん底・第一子茜さんの生誕と召天　引き揚げ時の奇跡　（略解１）

茜さんとは真民先生夫妻の第一子の女児の名前です。ご夫妻に6年ぶりに奇跡のような喜びが訪れました。当時はまだ先生は和歌を詠まれていましたのでその喜びを沢山詠まれています
待望の期待が一瞬にして悲劇に変わる茜さんの生と死。その子の霊による奇跡があります。

帰国後間もなく四国愛媛へ渡る

７，短歌から詩へ変身の時代1946年~1950年）

1946年5月四国へ渡る。三瓶に創立された私立山下高等学校の教諭に迎えられる
三瓶(みかめ)に4年間住まわれますがその間に短歌雑誌「海燕」を同人と共同発刊します。
1950年（41歳）「沸騰するわたしの詩心は、真実を求める心が強くなり型にはまった三十一文字に満足できなくなり」20年以上続けてきた短歌に別れを告げ、詩作に転向専念し、個人誌「ペルソナ」を発刊します。
「本気でやり出した短歌だったが、とうとう別れてしまった。だから本気という言葉はよく使われるがこれほど難しいものはないと言える」と反省しています。

８，試練・邂逅・名作誕生の時代（1950年4月~1956年3月）

⑴.恩師『八木重吉詩集』に遭遇　　（略解２）

4月に県立吉田高等学校に転勤･転居し,そこで八木重吉の詩集を偶然手にします。そのときの感激を綴っておられる文章があります。
「その頃わたしは、愛媛県の吉田という海岸沿いの町に住んでいた。ー中略ーそれにしても辺陬(へんすう)の町である。学術書とか、文学書などほとんどなく、文房具を買いに行く程度の店であった。
そうしたある日のこと、通俗本の並んでいる片隅に、創元選書の『八木重吉詩集』を見出したのである。あの日この詩集を手にとった時の感動を、今も忘れることはできない。今にして思えば、全く詩神の恩寵というほかない。ー中略ーこの詩人の詩は、その頃のわたしの心に、旱天(かんてん)の慈雨のように体いっぱい浸透していった。わたしはめぐりあいのふしぎということを、よく口にするが、もしこの詩集にめぐりあわなかったら、わたしは今日どうなっているであろうか。慄然とするものがある。「はなになりたい」は巻頭の詩であって、わたしの心を高揚させ、闇を光に変え、退を進に変え、詩心の開花へと導いたものでありー後略」（傍線おはら＝恩師の条件）

⑵.激しい自己変革、読書から暁烏敏(あけがらすはや)の文章を知る

1951年(42歳）になった真民先生はご自分のお父さんが亡くなった年になり、父の偉大さに比べ自分をはかなく思われ本当の詩人になるため、自己改革をしなければならないと厳しい修行を始めます。先ず、自宅近くにある大乗寺での参禅そして激しい読書で自己修行を実践します。その中で、暁烏敏(あけがらすはや)の本の中に「疑えば花ひらかず、信心清浄なれば花ひらいて仏をみたてまつる」という一文を発見しました。これこそお母さんがいつも念じていた「念ずれば花ひらく」言葉に通じるものであり、母の言葉の出典がそこにあるかも知れないと考えました。
翌1952年3月29日、暁烏敏(あけがらすはや)氏を訪ね、その言葉の出典を尋ねましたが「わしゃ知らん」とつれない一言でしたので真民先生はこれは、自分の力で切り開かねばならない、どうしても突き止めたいと「願」をたてます。高い目標設定ですね。そして「大蔵経」にあるかも知れないと考え海のように広くて深いこの教典を読み始めます。「大蔵経」は百科事典に匹敵する膨大なお経の全集です。一回読み通すのに1年はかかると私は思います。一度目、二度目では発見できず、三度目は一字一句を指で押さえて読んでいったがそれでも見つからなかった（三度目は1953年だと考えられます）
然し不幸なことに5月16日に最愛のお母様が亡くなられます。更に厳しい戒律、肉食を断じる等、ご自分に課されて修行をされる中、歯が悪くなり、目の病が進行していきます。そのような状況にもかかわらず、大蔵経を一字一句、指で押さえて読んでいくのですが見つかりませんでした。

⑶.大蔵経を3回精読するも見つからずスランプ（1952年）

目の病が進み、体力が弱り､大蔵経には求める言葉が見つからず、スランプに陥ります。この頃に

生まれたのが、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」という有名な詩句のある詩です。全文を紹介します。（行間開けをしませんことお詫びします）
「
詩に生きよ　詩に生きよ　それよりほかに　我れの生きゆく道なし
生きることや難し　生きることや苦し　子を抱いて　夕暮れの道を帰る
子と仰ぐ　夕焼けの雲よ　涙ぐましいまでの愛情よ。

死のうと思う日はないが
生きてゆく力がなくなることがある
そんなとき大乗寺を訪ね
わたしはひとり
仏陀の前に坐ってくる
力わき明日を思うこころが
出てくるまで坐ってくる

年をとれば故郷が恋しくなるという　その故郷をわたしはまだ知らない
はだしで故郷を歩いたという　山頭火の狂喜さえ　わたしにはむしろ羨ましいぐらいだ
ああ一度でもいい　わたしは生まれた処の土を嗅ぎたい
その時淋しい風がふいていようとも　わたしはそれを笛の音のように聴くであろう
エリ・エリ・レマ・サバクタニ（主よ、主よ、なぜ、わたしをおみすてになるのですか）
イエスよ　あああなたの最後のこえが　今日もきこえる」

この詩も大文字のところが有名ですが、全体をみると真民先生の苦悩の深さがしみじみと伝わってきます。なによりも聖書も深く読んでおられるところに晩年「祈りの詩人」と言われる所以があると思います。然し、この詩は「力わき明日を思うこころが　出てくるまで坐ってくる」とありますように最後は前向きになっています。これが真民詩の特徴です。

⑷.恩師に大邂逅する・仏心を頂く開眼の師　　めぐりあいのふしぎ　　（略解３）

このように自己改革に苦しんでおられたときに、前年から文通していた杉村春苔尼をお母さんと一緒に別府に訪ね、そのお姿に仏を見るような感動を受けます。
「わたしは先生を通して菩薩とつながり、仏とつながり、永遠なるものとつながる自己を知った。この人との邂逅は自分にとって大回心であった。この一期一会によってわたしの一切が変わった。新しい人生が開始されたと言ってもよいであろう」この夏一万詩の発願をしたことを伝えると念願成就の日はお祝いに、お茶をたててくださるという嬉しい便りをいただきました」
然し、目の病は進行し体は弱っていきます。そんな時に生まれたのが「めぐりあいのふしぎ」の詩です。
大いなる人とのめぐり会いの喜びと目が見えなくなって子どもを抱いていると行く末が案じられるという明と暗が同時に歌われた詩です。真民先生の凄いところは未だ光が見えない闇の中から明るい光を見るという姿勢です。努力すれば必ず光が見えると断定的に将来を観ていることです。これが真民詩の特徴です。

⑸.母の召天　1953年5月16日
熊本への旅行から間もなく72歳でお母様が狭心症で急に亡くなられます。ご自分の健康状態も悪い中での突然のことで真民先生の悲嘆は最高潮に達します。第三回目のどん底です。

⑹.「念ずれば花ひらく」の詩ができる
目の病は更に進行し1955年、中心性漿液性網膜炎にかかり半盲状態になります。杉村春苔尼僧からの手紙と祈りに支えられていたある日、天啓のように「あの言葉は『解』の部にある」との声を聞きます。それはすぐに見つけることができました。然し、「念ずれば花ひらく」の言葉は見つけることができませんでした。これは「やっぱり母独自のことばだったのだ」と、ここで真民先生は安堵感と達成感を味わったとわたしは思うのです。病の中にあっても<u>ぎりぎりの限界まで自分の思いに力を尽くし</u>到達した今、もうグラグラせず、フラフラせず、この言葉は母のことばの真言として唱えようと決心して生まれた詩が「念ずれば花ひらく」です。
「念ずるというのは前向きに生きようとすることであって、希望なのである。どん底に落ちても、念じながら這い上がってくる不屈の魂である」と言われました。

命がけ
命がけということばは
めったに使っても言っても　いけないけれど
究極は命がけでやったものだけが　残ってゆくだろう
疑えば花ひらかず
信心清浄なれば
　花ひらいて
仏を見たてまつる
この深海の真珠のような　ことばを探すため
わたしは命を懸けたといっても　過言ではない
人間一生のうち　一度でもいい　命を懸けてやる体験を持とう

⑺.利根白泉先生に癒やされる
目の病気に続き病は内臓疾患に広がり三人の医師から開腹手術を勧められましたが、既に出会っていた隠者･利根白泉先生は「そうではない。筋肉の病である」と薬草を調合して頂き、又不思議な力の入った叱咤激励のことば「自分を生かすのは自分ですぞ」によって生死を彷徨っていた世界から抜け出すのは1956年4月でした。
利根白泉先生については詩からの引用にします。

白泉先生の言葉
”自分を生かすのは自分ですぞ”
叱りとばすように
枕もとで言われた先生の言葉が
消えようとしていたわたしの生命に
火をつけた四十度ちかい熱のなかで
わたしは皿のなかのものを
つかんで口に入れた

静かな愛
もしもこれが
奇跡と言えるなら
奇跡と言おう
悶絶するような
苦しみの果てに
わたしを蘇えらせた
あの光を
あの静かな
愛の光を

桃咲く
病いが
また一つの世界を
ひらいてくれた

桃
咲く

長い艱難の時、真民先生が読まれた聖書のことばを記します
「今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません」　（ローマ人への手紙5章②―④）

９，つぼみ膨らむ時代（1956年4月~1967年3月）黄金時代の幕開け

⑴.一遍上人を尋ねる　（略解４）

1959年(50歳）真民先生に大きな影響を与えたもう一人が一遍上人です。その生誕地松山の道後温泉裏にある宝厳寺を尋ね一遍上人の等身大の木彫の像を見られます。右足が一歩前に出ていて今にも歩き出しそうな感じのする像です。時宗の開祖者･捨聖としての一遍を「一切の権威も彼の眼中になかった。一切の野心も彼の心中になかった。道元にもない、法然にもない、親鸞にもない、どん底的なものが、一遍にはあった。そのどん底的なものが、わたしをひきつけてやまないものである」と言われ尊敬して師と仰いでおられた真民先生は一遍が果たし得なかった60万人決定往生の発願を引き継ごうとされたのです。師と仰ぐからには、自分の行く道と、師の道とが、一つでなければならない」「その立像の跣(はだし)の足に手を触れ命の交流を乞うた。その時、一遍の血がながれこんできたのである」と引き継ぎの宣言をします。
一遍上人は60万人を念仏賦算(ふさん)によって民衆を救おうと発願されたのです。251,724人で終わっていることを突き止めた真民先生は残りのの348,276人をご自分の詩を賦算(ふさん)することで一遍上人の意志を引き継ごうとされるのです。凄い発想ですね。ここで「詩国」という種が播かれました
「詩国」とは真民先生が毎月1200～1500人に無料で配布した個人誌で、毎月先生が作られる新しい詩が掲載されたものです。95歳、500号迄続けられました。

ああ　一遍とは　何といういい呼び名であろう
生死事大　無常迅速　時人を待たず　人生は一遍ぎり
その人生を今日只今と　一刻一刻　一呼吸一呼吸
念仏に生き　時宗という　大きな花を咲かせ
今も風のなか　波の音のなかに　生き続ける人　一遍

（一遍上人語録　捨て果てて　p196~197)

⑵.森信三先生との出会い　　（略解５）
1962年6月、森信三先生との出会い一遍上人の後を継いで「詩国」を賦算（ふさん）する決意をされます。
森信三先生も偉大な方でどのように紹介していいか分かりませんが『学者にあらず、宗教家にあらず、はたまた教育者にあらず、ただ宿縁に導かれて国民教育者の友としてこの世の生を終えむ』とご自分を現しておられます。真民先生が大変尊敬されておられた方です.「二度とない人生だから」『一度きりの人生』の詩はこの方との出会いによって生まれます。
真民先生と風貌もよく似ておられました。『人生二度なし』を自戒の言葉とされた方です。
真民先生の「二度とない人生だから」の生みの親ともいえる存在です。真民先生は森信三先生の逝去の時に献げた詩があります。

坂村真民『詩国』第四九九号　平成十六年一月に掲げられています

人生二度なし
人生二度なし
森信三先生にお会いして
この言葉が
気海丹田の中に
焼き付き
わたしは新しく
スタートした
そして賦算誌『詩国』を発行し
平成十六年二月号で
五百号になる
この間一回も休むこともなく
刊行できたのは
先生の励ましの
おかげである
先生の霊よ
永久（とわ）なれ

「二度とない人生だから」の詩が完成したのは1965年県立吉田高等学校を定年退職の直前だと推定しています。
これでやっと真民先生の三大詩の誕生の経緯をお話することができました。

⑶.『詩国』発刊と賦算の始まり
1950年に始めた個人誌「ペルソナ」は父母のご恩に報いるためにという「個人的」な観点で詩を作っていたようですが、これからは「衆への開眼」（自分は詩を通して悩める人々を救いたいと目覚める）と言われるように不特定の大衆に語りかける詩を作るという決意をされたのです。従って作詩は命がけということになります。「詩は死」であるとの覚悟で詩を書いて一遍を継ぐ決意

をされます。一日二篇の詩作を目標とされその中から十数編を毎月自選されB5裏表に印刷した「詩国」という念願詩誌を毎月発行され無料で希望者に郵送又は配賦（近所の人）することを始めます。半ば盲目になるまで、開腹手術寸前に追い込まれるまでの求道と呻吟、写真にはすでに死相がでるまで病魔にさいなまれるまで修行をされ、そして恩師となる杉村春苔尼僧、利根白泉、一遍、森信三先生との不思議な出会いが積みかさなって「苦悩を突き抜け歓喜に至る」作詩活動、『詩国』賦算が始まるのです。。賦算とは「ふだくばり」時宗独特の行事で一遍上人が熊野神から受けた神託にもとづいて「南無阿弥陀仏、決定(けつじょう)往生六十万人」と記した札を配ること。決定とは信じて疑わぬこと。往生とはこの世を去って他の世界に生まれかわること。特に、極楽浄土に生まれること。（広辞苑）

⑷.詩国賦算の方法

賦算の方法は殆どが郵送です。切手を送ってくださる読者に毎月、真民先生が宛名書きをされました。そして封筒を取り「フゥー」と息を吹きかけられ封筒を開きます。そこに四つ折りにした詩国を入れます（詩国はB4です）。切手を貼って投函です。わたしが初めてお尋ねした1988年（79歳）の頃は800名位の方でしたが、間もなく1200名に膨れあがり最終的には1500名に達しました。この作業はまさに修行です。しかもひとり一人の切手の管理をされておられ、詩国が不要になった方には預かった切手を返送されました。今のようなコンピューターの時代ではありませんでした。
なんどかわたしは料金別納（切手を貼らないで別に郵便局の窓口でまとめて支払う方法）をお勧めしましたがそれをすると賦算にならないと叱られました。奥様とお二人でこの作業をされておられましたが1994年に奥様がくも膜下出血で倒れられてからはお嬢さまとお二人でなされていました。奥様が恢復される時期がありました。その時は切手貼りをなさったと伺っています。詩国は500号（2004年1月号）で終えられその後は「鳩寿」と題して15号（2005年9月号･96歳）迄続けられました。この詩国や真民先生の著作に命を助けられた方は数知れません。いくども奇跡のような救いの技が報道され記事に残っています。ことばは言霊とよく仰っておられました。
晩年の真民先生の生活は奥様の入退院が数度あり、その度に「妻を思う」深い詩がたくさん詩作されましたが、念じ、花ひらいた素晴らしい日々であり、お母様のいつも念じられておられた「念ずれば花ひらく」の証人であられたとわたしは思います。

10，花ひらく時代（1967年~1974年）

終の住処となる砥部に移る年（58歳）から教職を完全に退職(65歳)される時代です。
1967年2月には今まで発行していた個人誌に発表した詩を自選して一冊にまとめた「自選坂村真民詩集」が大東出版より刊行され、序文には森信三先生の名文があります。この本は全国の刑務所に配本される物語があります。NHKテレビへの出演も多くなります。
1968年には「生命の光」を友人から入手します。「生命の光」とは無教会主義・内村鑑三の系列にあるキリスト教幕屋の創始者手島郁郎師が発行する月刊誌です。これを読み真民先生は手島郁郎師に会いたいと切望されます。詩風に影響がでたのでしょうか？
1969年2月16日最大の恩師である杉村春苔尼僧からの手紙は衝撃的です。「今回の詩国は宗教の匂いもなくて心に吸い込まれるように思われました。真民様には詩其物が宗教でいらっしゃるのですし、詩を拝見する人達も、宗教を意識しては限られてしまいます。仏教者だけの詩人にはなって頂き度くない。読む人が、それを仏教者は仏を心に、キリスト教徒はそれを神に、万人万様の詩教を得られるように、誰の心にも吸い込まれる愛誦される詩を、私はお願いし度いと念じます。私がいつも思います事又先生にも申し上げたい事がございます。ー中略ー坂村先生の静かなもの

の中から大きな動を、道にころがる小石の中にも過去未来を見、石や花と対話のできる、そして無想の相の広大さを悟っていられる真民先生をお幸せだと思いました。どうぞご尊体充分お気をつけになって長寿なさって下さい。たいそう60の坂を気にしていられますが、先生の詩命は未だ未だ終わりません。先生には御仏がついていられます。しかし御養生をなさる事も仏法の法、これをお破りになりませんよう御精進くださいませ」
助言でありながら詩風の変化を賞賛されている内容です。
1970年「念ずれば花ひらく」第1番碑が京都に建立されます。詩碑建立物語の始まり
1973年「念ずれば花ひらく」第5番碑が宝厳寺に建立、これは真民先生のお墓となります。
1974年私立新田高等学校を退職され職業人生を終わられます。65歳

11,歓喜の時代（1975年~2003年）

第1詩集「六魚庵天国」（1951年発行）の表紙裏面には「苦悩を越えて歓喜に到れ」との念願が記されていました。ベートーヴェンの生涯をロマンロランはそのように表現しました。交響曲第九の第4楽章後半に相当するのが真民先生のこの時期だと私は考えます
『詩国』賦算の部数は先生の手元からは1200通、後に組織される「朴の会」からは有志の方の自発的な賛同又は依頼によって『詩国』の印刷部数は1万部に達しました。『詩国』賦算からは健康が保たれ500号まで一月も休まずに発行されます。
1975年「鳥は飛ばねばならぬ」の詩が完成、1979年（70歳）から83年（74歳）にかけて随筆集三部作が出版され、ご夫妻で北京旅行、ヨーロッパ旅行に出かけられます。
1984年（75歳）NHK「訪問インタビュー」番組で「念ずれば花ひらく」が制作され放映されます。この番組が1989年昭和天皇崩御の日にNHKは全番組を変更してこの「念ずれば花ひらく」が終日放映されました。
1990年には真民先生の希望でもあった「後を継ぐ者達」の奉仕活動が活発になり、毎月の例会を公開して「朴庵例会」が持たれ、『詩国』賦算の支援活動として「詩国朴の会」から発展して全国に読者が広がり地方にもその運動が広がりました。「湘南箱根朴の会」（1993年発足）もその一つです。「全国朴の会大会」は8回開催され、その度に「念願詩碑」と建てたいと希望する人々が増えていきました。
然し1994年（85歳）奥様がクモ膜下で倒れられ入退院を繰り返しますがお嬢さまの手厚い祈りの看病が奇跡の回復をもたらします。このころから奥様の近況報告のような身近な者を大切にする詩がたくさん生まれていきます（真美子さんの祈りの看病）

12,捨の時代（2004年～2006年）

人生晩節が一大事と常々自戒的に仰っておられた通り、一遍の弟子としての自覚を持たれ捨て果てる道を選ばれます。2004年1月6日真民先生95歳の誕生日に第171回朴庵例会が開催されましたが席上突然「これで最後にします」と発言され出席者は驚きましたが、かねてからの思いを述べられたのです。『詩国』も丁度499号に達していました。ご希望にそってすべての各地の組織も解散しました。
第8回全国朴の会大会及び朴庵例会第172回(いずれも最終回)が松山市県民文化会館で盛大に開催され席上で
朴の会の始まりから終わりまで責任をもって奉仕された片山　克夫妻に感謝のことばを述べられ真美子さんが片山　克夫人に花束を贈呈しました。詩碑建立を全世界に広められた功績も偉大です。
真民先生の希望によって全てを完了しました。

13.碑の建立の波と世界に飛翔する「念ずれば花ひらく」

⑴.建立の意図

真民碑は全部で737あります。その内、外国には５大州にまたがり36あります。こんなに多くの碑が一人の詩人から出ているのは真民先生だけではないでしょうか？これは奇跡のようなことです
建立の意図はさまざまですが、真民詩に共通して流れている川と言いましょうか通奏低音はベートーヴェンの「苦悩を突き抜け歓喜に至る」だとわたしは考えています。特に「念すれば花ひらく」は美しいことばであり、力強さがあり、光が見えてくることばです。人生で苦境に入ったときにそこに止まらず希望に向かって動き出す力を与えてくれることばです。今日、皆さんにお伝えしましたように、この詩は真民先生の「どん底」から湧き出た真のことばです。
人は皆、どんな人であろうとも「いのり」と「ねがい」を根源的な欲求として持っています。絶体絶命の時に「なにかにすがる」という気持ちがあります。そして、誰かが困っていたら、その人のために具体的な何かはできないけれども、その困っている人が早く幸せな道を見つけて切り開いていって欲しいと願う欲求をどんな人も持っています。そうした人の持っている純粋な欲求が「念ずれば花ひらく」を通して実現する、そう感じた人が、この真言を後世に伝えたいという使命感をもって、真民先生にお願いし、その願いに応えてくださったことによって各地にこの碑が立つことになりました。
もう一つの動機があります。それは真民先生の願いを実現しようとする弟子的な思いから発するものです。

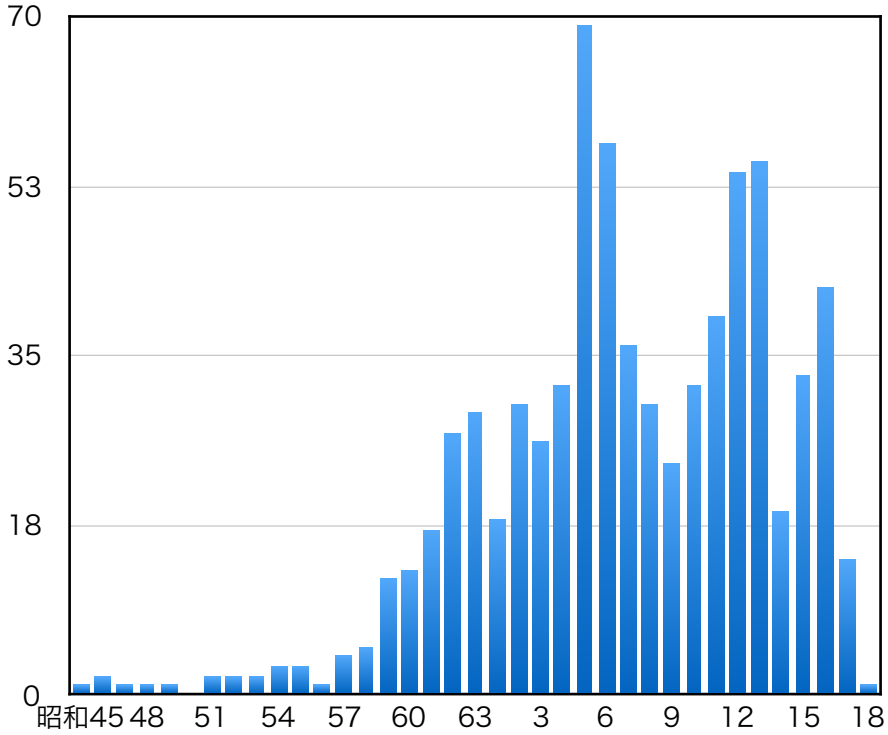
「三諸願」
一人の祈りを　万人の祈りに一人の願いを　万人の願いに
一人の夢を　万人の夢にこれがわたしの詩願である。中略
一人でも多く共鳴共感して下さる方があれば
必ずや大宇宙大和楽の世界が実現し
青い美しい星としていつまでも地球は
生き続けてゆくであろう。

⑵.碑文はすべて自筆です

碑を建てるためには、真民先生をお訪ねし発願の趣旨を説明し、思いを語ります。すると真民先生はその方の思いを感じてその方の為の碑になる文字を書いてくださいました。737の碑が全世界にありますが全て真民先生の直筆を彫刻したものです。二つとして同じものはありません。
多くの方は書を額装されて大事に持たれています。真民先生はその費用をお取りになりませんでしたので、わたしは墨と用紙（和紙）代をいただくようにお願いをしました。（会計顧問でした）
そういう訳で、737の碑には建立者それぞれの人生ドラマが入っており、その方の未来を切り開く力となり、又、それに接する人々にその精神を伝播（でんぱ）する使命を果たしています。
真民先生は特に「愛と平和」を全ての碑に入魂されておられました。
737碑の90％以上は「念すれば花ひらく」です。この近くでは700番碑が熊本県立玉名高等学校にあります　「二度とない人生だから」の全文はわたしの知る範囲では4カ所です。この近くでは佐賀市朝日町社会福祉法人･心の故郷･小部保育園の園庭にあります。毎日園児は手話をつけて「二度とない人生だから」を声を出して語っています。737の分布ですが日本国外が36です。その他は国内で全県にあります。建立の始まりは1970年でその後の推移をグラフにしてみました。海外碑の明細は前頁に掲げました。(資料提供者　片山　克　元全国朴の会会長)

合計737

	年号	建立数
1970	昭和45	1
1971	46	2
1972	47	1
1973	48	1
1974	49	1
1975	50	0
1976	51	2
1977	52	2
1978	53	2
1979	54	3
1980	55	3
1981	56	1
1982	57	4
1983	58	5
1984	59	12
1985	60	13
1986	61	17
1987	62	27
1988	63	29
1989	64	18
1990	平成2	30
1991	3	26
1992	4	32
1993	5	69
1994	6	57
1995	7	36
1996	8	30
1997	9	24
1998	10	32
1999	11	39
2000	12	54
2001	13	55
2002	14	19
2003	15	33
2004	16	42
2005	17	14
2006	18	1



福岡県立八女高等学校に設置された第505番碑

海外建立場所番号順

	年代	碑番号	国名	場所	建立者
1	1987年03月	72	インド	霊鷲山山頂	ふるさとに詩を建てる会
2	1988年03月	73	ネパール	カトマンズ	るさとに詩を建てる会
3	1987年08月	83	チベット	聖地ラサポタラ宮殿前	るさとに詩を建てる会
4	1987年11月	91	アメリカ合衆国	Jopo Mission of hawaii	伊豆藏福治郎
5	1989年01月	124	モンゴル	ハルハ河畔ジャパンブッダ	杉浦祖玄
6	1990年10月	148	スリランカ	ケラニヤ寺院	田中龍玄
7	1990年11月	154	アメリカ合衆国	モレンシイ教会の中庭	杉浦祖玄
8	1991年07月	166	ミヤンマー	アーナンダ寺院	杉浦祖玄･他
9	1992年04月	184	オーストラリア	ブリスベン･ハーベィ氏庭	杉浦祖玄
10	1992年04月	185	ブラジル	サンパウロ･希望の家	杉浦祖玄
11	1992年04月	218	韓国	慶州　仏国寺	ふるさとに詩を建てる会
12	1992年04月	219	ニュージーランド	オークランドの庭園	ふるさとに詩を建てる会
13	1992年11月	236	インドネシア	ジャワ島ポロブドウール	ふるさとに詩を建てる会
14	1993年05月	237	ネパール	ルンビニー園釈迦生誕地	ふるさとに詩を建てる会
15	1993年05月	238	インド	クシナガラ	ふるさとに詩を建てる会
16	1993年05月	273	ベトナム	ホーチミン市	ふるさとに詩を建てる会
17	1993年06月	280	フランス	パリパンドームDCカード内	片山　克　森本青芳
18	1994年03月	303	イスラエル	ヘブライ大学植物園（エルサレム）	小原靖夫
19	1994年06月	326	アメリカ合衆国	SHOEI FOOD USA	本田友彦
20	1994年06月	331	アフリカ	キリマンジャロ頂上	ふるさとに詩を建てる会
21	1994年06月	332	アフリカ	ウガンダ国ビクトリア湖近く	ふるさとに詩を建てる会
22	1995年06月	372	ネパール	パレタ市	杉浦祖玄
23	1995年09月	381	ベトナム	ホーチミン市　華厳寺	小林良正
24	1995年09月	382	ベトナム	ホーチミン市　円明寺	小林良正
25	1996年08月	402	フィリピン	ドマゲッティ市	立花之則
26	1997年04月	429	カンボジア	カンダール州いろは小学校	水谷栄覚
27	1998年09月	444	アメリカ合衆国	マリアナ海溝ヘリにて無事投下	杉浦祖玄
28	1997年12月	448	イタリア	ローマ浜清	石丸貞雄
29	1998年05月	458	カナダ	バンクーバー東漸寺	橋本随暢
30	2001年05月	599	アメリカ合衆国	ニューヨーク禅堂　正法寺	嶋野栄道
31	2001年05月	600	アメリカ合衆国	ニューヨーク郊外大菩薩禅堂金剛寺	嶋野栄道
32	2003年05月	664	カンボジア	クナイ･スナイ小学校	松野宗純
33	2004年03月	679	中国	上海市(株)エース中国本社	新川柳作
34	2004年04月	689	中国	敦煌市沙湖楽園	鍵山秀三郎
35	2004年08月	709	ギリシャ	オリンピア市役所前聖火採取地	松岡　功
36	2005年08月	737	台湾		鍵山秀三郎

⑶.建立の流れ　　次頁に年別数とグラフで推移を示します

グラフからお分かりのように昭和の終わり頃から漸次増え始め平成5年にピークに達しています。「朴の会」や「朴庵例会例会」銀行でのロビー展、NHKでの放映で真民先生を訪問する人が増えてきました。特に昭和最後の日にNHKが全番組を中止して昭和59年に製作していた「念ずれば花ひらく」の再放送を終日行いました。多くの方が知ることになったのです。地元、砥部では真民先生のお話を聞く会ができていましたが、その会を多くの人に開放しようとする動きが盛んになり地元の有志の方々の尽力によって1990年（平成2年）1月第一回「朴庵例会」が開催され、誰でも参加できるようになりました。全国から毎回100人以上の参加者がありましたがこの会場を整えるのにも地元の人々と企業が並々ならない尽力をされました（美談が沢山ありますが割愛します）会場は「開花亭」と呼ばれる和食のお店ですが「朴庵例会」のために特別の藁葺きの庵を造ってくださったのです。場所は愛媛県砥部町にあり、毎月全国各地から参加するのは困難を感じた地方の人々がその地方で真民詩を読む会を結成する動きに発展し、わたしも神奈川県で「湘南・箱根朴の会」を組織し毎月例会を開催しました。何故「朴の会」、特に”朴”なのかについては後に説明します。各地の朴の会が集まって全国大会も8回開催しました。そのような活発なファンの「祈りの根」が深く広く広がり碑の建立も盛んになっていきました。

海外建立場所は次頁の通りです。

⑷イスラエルに「念ずれば花ひらく」を建てる決意

このような皆さんの活発な動きにわたしも心が動き、「イスラエルに平和がやってこないかぎり世界は平和にならない」かねてから長い間考えていましたので、日本から民間人で平和の祈りを送ろうと決意しました。これにつきましては「花の中の碑」という本に詳しく書きましたのでここでは簡略にしますが、碑には日本語･ヘブライ語･英語の３カ国語の文字が彫られています。

第303番碑には特別の名前をつけました。ヘブライ大学の植物園に置かれることになり、園長さんも花が大好きな方で真民詩をよく理解していただき「花の中の碑　平和を祈る。『念ずれば花ひらく』第303番碑」としました。建立式は1994年（平成6年）3月31日晴天のエルサレムで挙行しました。この「花の中の碑」の周りにはその後247本の木を日本の有志の方からの沢山のご寄付で植樹しました。大きく成長していると思います。1996年11月16日にはヘブライ大学の植物園の責任者であるイツハック･アイアロンさんが来日され真民先生を顕彰訪問されその折りにはイスラエルで毎年文化に功労した世界で3人にのみ送られる金賞を授与していただきました。翌年も来日され日本の松を植えたいので京都の松を見たいと仰ってご案内し後日松の種を3種送りました。種から育てるとイスラエルでも育つと考えられていました。よい土地に落ちた種はよい実を結ぶ、よい土地にするには愛をこめて耕して肥料を与えておかねばなりません。世界共通の真理です。又話しが長くなってはいけませんので真民先生が下さった詩を紹介します。

永久に

八重の潮路を越えてゆく
念ずれば花ひらく第三百三番碑よ
エルサレムの都は晴れて
野の百合たちも
鳥たちも雲たちも
喜び迎えてくれるだろう
愛と希望と平和のため
永久（とわ）に建ち続いてくれ

⑸.湘南・箱根朴の会の活動

この会は20名足らずの小さい会でしたがユニークな方の集まりでした。有名な禅師も参加してくださいました。「日本の心を世界に」発信されている方も遠方より参加され、豊かな発想が次々に湧出しました。先ず計画し実行したのが「全国朴の会大会」を主催しようということになりました。そして、「どうせやるなら、真民先生が大好きな朴の花の沢山咲くところでやろう」と決まりました。情報を集め奔走して岐阜県白川町の廃校になった小学校をお借りすることになりました

本来なら箱根で実施したかったのですが1989年（平成元年）10月に真民先生を小田原（第125番碑建立式）にお呼びしていましたので重複を避けたわけです。岐阜は真民先生の希望でもありました。「岐阜は日本のへそである。朴の花が沢山咲くところ。朴葉の名産がたくさんある」ということで決定しました。では、何故、朴なのか？それは真民先生がタンポポに次いで二番目に好きな木であり咲く花でした。

そんなことこんなことで湘南箱根朴の会が主催で岐阜県白川町で第3回全国大会を1992年（平成4年）5月30日に開催しました。株式会社イエローハットの創業者,鍵山秀三郎氏の故郷近くでもあって大変なご支援をいただきました。鍵山秀三郎氏のご出席があって岐阜県の方も多く参加され、そのお力で多くの碑が立つようになりました。平成5年は69碑、翌年は57碑です。

朴とタンポポ

わたしが一番好きなのは
朴とタンポポだ
一つは天上高く　枝を伸ばしてゆく　野の木であり
一つは地中深く　根をおろしてゆく　野の草だからである
この天上的なものと
この地上的なものを
こよなく愛するがゆえに　願えることなら
この二つを　わたしの眠るかたわらに　植えてもらいたい

風ふけば　朴の花は　ほのかに匂い
タンポポの種は　訪れた人の胸にとまって
わたしの心を　伝えるであろう

朴礼賛

朴は字もよいが　ほおというあのひびきがよい
葉もよし、木の質もよし　どこまで伸びてゆくかわからない
あの大木性はたまらない魅力だ
しかも急がずあせらず、朴直朴実　そのことば通り
天に向かって徐々におのれをひろげ

百花咲き尽くしたところ　夢のように大きな　まっしろい花をつける
その香木のすばらしさ　朴よ　おまえこそ本当に　木の中の詩人
木の中のロマンチスト　裸木の姿もいいが　万緑の侯のみずみずしさは
全く木の中の阿羅漢(あらかん)だ
わたしはお前の下に眠ろう　そして来世は一樹の朴になろう
（阿羅漢(あらかん)―――切の煩悩を断ち生死を離れた仏教修行の最高の段階に達した人―筆者注記）

⑹.英語対訳「鳥は飛ばねばならぬ」出版

大会が終わって間もなく湘南箱根朴の会は今度は真民詩を世界に発信しよう、そのためには詩の英訳が必要だということで会員の中に英語に堪能な坂井孝彦氏が担当することになり、どんどん訳され、フランシス･フォードさんの監修を受けられて原稿が完成しました。さぁ、わたしは大変です。出版しなければなりません。権威もお金もない地方の人間には荷の重すぎる役割をはたすことができるのだろうか。窮地に追い込まれました。まさに「念ずれば花ひらく」の祈りです。かけずり回りましたね。若さ（当時51歳）と行動力がありました。その時も鍵山秀三郎氏のお力をお借りして「ぱるす出版」さんが出版を引き受けてくれました。この本には「鳥は飛ばねばならぬ」という本題がつきました。その品格ある本はその後、全国学校図書館協議会選定図書となり今も多くの人々に愛読されています。坂井孝彦氏はこの本をアメリカ合衆国当時のクリントン大統領に送る尽力をされ、それが実現しました。

14,祈りの詩人　　略解６ユニテ

真民先生の生活は午後４時30分に就寝され午前零時に起床、未明混沌の霊気の中で座禅をされ、心を浄め、作詩され、3時36分（寅の一刻=この時間は野鳥が目覚める平均時間だそうです。又宇宙の霊気が一番生き生きとしている時間だと仰っておられました。）に屋外に出られ「三つの祈り」を献げておられました。
一つ、宇宙の運命を変えるような核戦争が起きませんように
一つ、世界人類の「一致」が実現しますように
一つ、生きとし生けるものが平和でありますように

これらの祈りと願いが真民詩の深い川に流れている思いです。そして個人の願いが万人の願いになるように祈っておられます。お互いに許しあうこと（愛）と平和を！

ねがい

あなたに合わせる手を
だれにも合わせるまで
愛の心をお与え下さい
どんなに私を苦しめる人をも
すべてをゆるすまで
広いこころをお授けください

ねがい

一人のねがいを　万人のねがいに
一人のいのりを　万人のいのりに
一人のゆめを　万人のゆめに
一人のあゆみを　万人のあゆみに
高めてゆこう　広めてゆこう
守らせたまえ　導きたまえ

15.師をもつ喜び

「人間として最高の喜びは、終生の師にめぐりあうことである。人間と動物との一番大きい違いは、一大回心を持つことである。中略ー師とのめぐりあいのふしぎは、星のように光り輝き、虹のように美しい。それにしても、そのような唯一人の師にめぐりあうことは、いかに至難なことであろうか。長い人類の歴史のなかで、わたしが一番感動するのは、師にめぐりあった弟子の喜びの言葉である。略ー一遍の師は空也であった。「空也上人は我が先達なり」と言い切っている。むろんこれは、この世のめぐりあいではなかった。しかしこうしためぐり会いもまた尊いのである。歴史を飾る美しい話である」（一遍1239~1289･空也903~972)

真民先生の師はたくさんおられます。その時々のことばは喜びに満ちています

八木重吉、杉村春苔尼僧、利根白泉、一遍上人、森信三そうして1970年代前半に手島郁郎と終生の師に恵まれています。真民先生は師を求めて足を運んでおられます。上記以外にも影響を受けた多くの師を訪ね求めています。求めなければ得られないことを証している人です。

師をもつことは長い人生で行き詰まった時に留まる事なく新しい道、多様な可能性を見いだせる機会が増えます。若い人に示唆に富むことです。

旧約聖書・コレヘトの言葉（伝道者の書）に次のような目の覚める言葉があります。

「若者よ、お前の若さを喜ぶがよい。青年時代を楽しく過ごせ。心にかなう道を、目に映るところに従って行け」（新教同訳コレヘトの言葉11章9節）

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに。（新改訳伝道者の書12章1節）

16.詩歌をどう受けとめるか

「めぐりあいのふしぎ」や「念すれば花ひらく」の詩がどのような時、どのようにして出来たかについて私なりの説明をしました。解釈は各個人の自由であることは言うまでもありません。芸術は音楽であれ、絵画であれ、バレエであれ、すべて鑑賞する側に解釈と理解の決定権があります。（コミュニケーションの決定権は受け手側にある）然し、作者の意図を理解しておくのも大変重要です。

「念ずれば花ひらく」の詩を誤った解釈をする人がいる。又理解出来ない人がいると真民先生が嘆いておられたことがあります。それは、ある高名な方がタンポポ堂（真民先生の部屋の名前）を訪れ「真民さん、念じても花は咲かんぞ。念じて咲かせてみよ」と言ったそうです。真民先生は心の中で「気の毒な人やなぁ」と思いながらじっと黙っておられたら、しばらくして、その人は「ばつが悪そうな顔をして帰って行った」そうです。私は敢えて冒険をして皆さんにお伝えします。

「念ずれば花ひらく」は「少年よ大志を抱け」になります。

何度も繰り返しますが真民先生の詩は苦しみから始まっても最後は希望につながっています。闇から光へと転換する「苦悩を突き抜け歓喜に至る」精神が根底にあります。「苦しいときは苦しいと言っていいんだよ」「とことん悩んでいいんだよ」道は一つではない。必ず、あなたにふさわしい道が開ける。そのことを信じなさい」と私たちに呼びかけています。

真民先生が詩国を賦算する目的の一つで特に晩年、強く願っていたのは後を継いでくれる若い人たちに、人生苦しいときにわたしの詩を読んで元気を取り戻して欲しいと願っておられました。

わたしの詩

わたしの詩は　生きるために苦しみ
生きるために泣き生きるためにさげすまれ
はずかしめられても
なお生きようとする
そういう人たちに
ささげるわたしの願いのかたまりであり
湧き水である

17,念ずれば花ひらく第505番碑

最後に皆さんに迎えていただいた「念ずれば花ひらく第505番碑」についてお話させていただきます。この碑は平成11年7月14日、筑後市高江75—2 の息子の自宅に私が就農記念に建てた碑です。事情があって平成14年6月に碑は筑後市立病院へ移設されました。今回の移設は私の大恩人と迎えてくださった八女高等学校の皆さんのお力によるものです。感謝一杯です。この碑には坂村真民先生が額をつけて祈願してくださったものです。

「苦悩を突き抜け歓喜に到れ」「若者よ、大志を抱け」
「悩む者、我に来たれ」「求めよ、さらば与えられん」
「Pray,and any flower of yours will come out」と第303番碑につながる碑です
特に悩めるときの「助けの石」（エベン・エゼル）となります。そんなときには額をつけて悩みを語ってください。1000年の石です。
「念ずれば花ひらく」の英訳は
「Pray,and any flower of yours will come out」です。
anyはご存知のように単数形で「どんな人にも、それぞれの個人、ひとりの例外なく」を指します。
come out、実現する。そのためにPray,祈ることです
生まれてきた者には　必ず何かの使命がある
それを見出して成し遂げる
光を見出すこと　この世は決して闇ではなく　必ず光が射してくる
愛に目覚めること　人を愛し世を愛し万物を愛し
すべてに感謝し　手を合わせてゆくことです。
そのために
大切なのは、今です。一呼吸、一呼吸の今を、大切に
大いなる目的に向かって進んでください。
皆さんの健康と大躍進を祈り、私の話を終わります
ご静聴有難うございます。

18,長詩　ラビン首相の死を悼む

イスラエルのラビン首相は/現在地球上に存在する/各国首相のうち/
最も偉大な真の平和論者であった/凶弾に倒れた1995年11月4日/彼の内ポケットには/
シール・ラ・シャロームが/入っていたという/その歌詞の一部を/ここに記しておこう
　　ただ歌え平和の歌を/祈りを小声でつぶやくな！/平和の歌を歌え/大きな叫びで！
　　希望を持って目を上げよ/武器を通してでなく/戦争の歌でなく/愛の歌を歌え
　　「いつかその日がくるであろう」と言わず/その日を来たらせよ
　　なぜなら、それは夢ではないから/そして、すべての広場で/平和の歌声をあげよ

こういう首相が/他にいたであろうか/もう一つ彼の言葉を聞いて下さい
それは死の６週間前/イスラエル、パレスチナ協定に調印のため
アメリカのホワイトハウスで/
ヨルダン国王/エジプト大統領/アラファト議長/クリントン大統領と
並んで彼が言った言葉である
　　よく見てください/あなたの前にある光景は/つい3年前まではあり得ない
　　考えられない光景でした/詩人のみが夢みたことでした
　　我々は非常な痛みですが/兵士たちや市民たちが/
　　死をもってこの瞬間を可能にしてくれたのです

このような言葉の吐ける首相が/ほかにいるでしょうか/
でも平和というものが/どんな困難なものであるか/ガンジーも撃たれ/ケネディも倒れ
先頭に立つ平和論者を狙う凶弾は/これからも続くだろう
イスラエルはわたしが尊敬する/手島郁郎先生が/もっとも愛した国/
またヘブライ大学の校内には/わたしの「念ずれば花ひらく」/平和念願の碑が
小原靖夫さんによって建立され/イスラエルとは深いつながりを持っている
またタンポポ堂には/イスラエル制のメノラーがある/わたしはこのメノラーに灯りをつけ
あとに続けと/地球の平和を祈ってきた

長い詩になったが/どうしてもつけ加えたいことがある
これは世界各国の首相が/葬儀に参列し/この偉大な人の死を追悼したのに
日本は外相だけを送ったに過ぎなかった/それも最初は駐在大使でよいとの/見解だったという
何という哀れな国であろう/世界の金持ち国といわれながら/その心の貧しさを露呈した。
　　一挿話である

大宇宙の
大念願は
大和楽である
大宇宙
大和楽
この六字十音の念願を
更に更に強固にしてゆこう

坂村真民年譜（作成者おはらやすお）

1909(明治42)	1月6日　熊本県玉名郡府本村（現、荒尾市）に生まれる。本名　昂(たかし)
1912(明治45) **3歳**	その地方に赤痢が集団発生、父、姉に次いで避病舎に送られる『どうせ死んで焼かれるのだから、いい着物はきてゆかない」と母を困らせる。人間の命を見つめるものがわたしの心の中に大きく芽生え始めていた。青春時代無常に心を惹かれる芽となる　　死という宿命を知った
1913(大正02) **4歳**	まだ幼い私をおんぶした母が、田んぼのなかにある共同墓地に入って行き、乳が充分飲めずに死んでいった童子童女の墓石に白いあたたかい乳をしぼってかけておがんでいる母の姿ーーー母の慈愛　母の信仰　夢のような美しい思い出
1915(大正04) **6歳**	玉名郡玉名村元玉名に転居。メルヘンのような思い出の地　父との釣りや遊び
1916(大正05) **7歳**	父は絵入りの古事記を買ってきてくれた。父は画報のようなものをとっていたその中にドイツ兵の悲惨な姿が沢山載せられていた。今でもめをつむると負傷兵たちの惨状がありありと浮かんでくる。わたしが戦争嫌悪者となり、成長するにつれ、(戦争に）ある種の抵抗感を強く持つようになったのも、そのあまりにも痛ましい画報を見たからである。
1917(大正06) **8歳**	9月父急逝（癌）、享年42歳を越えず。全ては急変、貧乏のどん底を体験、母36歳、5人の子どもを育てることになる。父の郷里に帰る。わたしは長男だったため母と苦労を共にしてきました。父の里村に移った一家6人が寝るところもないほど雨漏りする暗い家に移り住み、履くものも自分で作り、生きるために母の内職を手伝う生活が始まった。初めから貧乏であったらコンプレックスも起きなかったであろうが、校長の子として育てられたので、一瞬にして其れが崩れ去った。坂ばかりの山村に移り住んで、草履を作ることを習い、それを履いて谷間の小さな複式の学校にかよった。芋やそばを作った。他人の草履も作った。母は長男のわたしをつれてよくお寺に参った。父の供養に毎日共同井戸は誰も起きないうちに水を汲む日々。体の小さかったこと、体が弱かったことにもコンプレックスであった。コンプレックスはまだあった。書道、絵画。音楽コンプレックスがわたしを苦しめた
1919(大正08) **10歳**	5年生の時、谷間の学校が東西の村が合併して村の中央の山の上に小学校が建つ。山道である。飲み水一滴でない学校であった。東西の子が喧嘩ばかり、わたしの孤独は深まるばかり、路傍の花、タンポポや木や鳥に語りかけた。
1921(大正10) **12歳**	県立玉名中学入学、山坂往復12㎞の道を通う。学校も狐や狸の出るような所にあり、学校は面白くもなく友もなかった。孤独な明け暮れをした。そんなことから野の花、野の草の強さ美しさを知り、木や草や鳥たちと心を通わせ、それがやがてわたしの骨格となり、細胞となり、血液となり、魂となっていった。酉年生まれのわたしが鳥たちの自由な世界に接近していった。あの異常な孤独が思われてならない(A-173)自然詩人的な性格が積もり積もった
1924(大正13) **15歳**	軍事訓練が開始される。小さいので騎兵銃を持たされた。差別いじめによる屈辱感
1927(昭和02) **18歳**	内務省立神宮皇學館に入学。日本神道の学校。聖書も学ぶ（推定）　どうしてこの学校を選んだのかと聞かれる「日本で一番授業料が安かったからである」短歌を作り始める。趣味からではなく、真実に生きたい念願からである。　　山部赤人から万葉に入る。多感な青春の日を伊勢の地で4年間すごした。五十鈴川の川べりで、小さなお寺の一室を借りて、自炊していた。米をとぐにも、茶碗を洗うにも、湯を沸かすにも、すべて、この川のお世話になった。殺生禁断の川だから魚は人を恐れることもなくわたしが音を立てると皆寄ってきた。自然の大愛に抱かれて古来からこの国が持つ海と山と川との美しさに触れて育った時期である。　校内で発行される雑誌に「真民」の名で投稿　　島木赤彦から現代詩に近づく
1929(昭和04) **20歳**	短歌に専心するため岡野直七郎主宰の「蒼穹」に入る(B-12)　探求心、極める志向、本気
1930(昭和05) **21歳**	岡野直七郎師に会うため上京する。短歌をつくることによって自分自身を開花結実させたい.。青年時代のすべてを31文字にかけた。三重から東京まで貧しい学生がよくぞ出かけた。行動力

1931(昭和06) 22歳	皇學館を卒業、不景気のどん底江で職はなく、故郷に戻り画図(えづ)小学校の代用教員となる
1932(昭和07) 23歳	有明海に面した小天小学校に変わり5年生男子を受け持つ。ひとりの発達障害の児童に心を配り成長させ、周りの先生方を驚かせた
1934(昭和09) 25歳	4月新天地を求めて朝鮮に渡り、新設の全羅南道順天女学校に迎えられる。遍歴の第一歩 9月忠清北道清州公立高等女学校へ転勤　官憲による圧迫差別
1935(昭和10) 26歳	一時帰国して、玉名の人・辛島久代と結婚
1936(昭和11) 27歳	20代を終わる記念として「与謝野寛評伝」を書き蒼穹社より出版。中河与一氏から賞賛
1938(昭和13) 29歳	第一回目の召集、昭和　15年1月3日除隊　新派和歌の研究を志す。借金をして文献を買った。 牛車一台一杯に本や和歌原稿等積んで、朝鮮の若い詩人の家に託して日本に引き揚げることになった。日本に送られることはなかった。
1941(昭和16) 32歳	3月第一子茜生誕と召天、待望と絶望が同時にたってきた。息をしないわが子を抱いて寝た。爪が美しかった。短歌が沢山のこされている。第2のどん底 4月全羅北道官立全州師範学校に転勤 受け持ちの女性とたちが、町中で一番美しい人形を探し求めてきて、どうか、このお人形を亡くなった茜ちゃんだと思って可愛がってくださいと、心をこめて贈ってくれた。生徒達に助けられる
1945(昭和20) 36歳	8月6日、第二回目の召集、15日敗戦除隊 11月、何一つ持たず引き上げ熊本に戻る。わたしは引き上げの時、釜山港で家族と別れ別れになり、言語に絶する苦難を味わったが、茜の霊が救ってくれた。それ以来わたしは霊の存在をはっきりと知り、霊の電波を確認した。妻は一歳半の子を背負い二人目がお腹に宿り大きな人形（茜の化身・霊）を持っていたので荷物も人一倍多く持って汽車に乗り込む。わたしは軍服を着ていたので取り調べを受けるために妻子と引き離せれ、船に乗るときは妻は歩けなくなりどうすることも出来なかったとき、将校らしいアメリカの兵隊さんが人形と引き替えに荷物を持って運んでくれた。人形はアメリカに渡った。位牌だけは父さんがしっかりと抱いて持ちかえってきた。どん底２
1946(昭和21) 37歳	5月、家族を連れて四国、愛媛県三瓶町に転居、和歌の同人の招き 三等船室の一隅に母、私、妻、生後2年の子と、生後2ヶ月の子の一家族がかたまって座っている。老朽船「しげひさ丸」はやっと八幡浜についた。船は激しく揺れた。四国の山河は生きる力と望みを与えてくれた。明るい海、明るい空、鳴く鳥の声にもさわやかさがながれていた。わたしに詩心を蘇らせてくれた。母が付いてきてくれた「仏の国、四国の風は涼しいなぁ」母の第一声 山下汽船社長の建学の意図・女子教育に賛同・ 私立第二山下高等女学校の教諭に迎えられる。 10月佐伯秀雄と短歌雑誌「海燕(うみつばめ)」を発刊する。
1950(昭和25) 41歳	1月、父の年を越え、自分の無能才無きを悩む。その大恩に応えるために、個人誌「ペルソナ」を創刊し、長い短歌生活に別れを告げる。 本気でやり出した短歌だったが、とうとう別れてしまった。だから本気という言葉はよく使われるがこれほど難しいものはないと言える。真実を求める心が強くなり型にはまった31文字に満足できなくなり、詩に転じた。以後詩作に専念するも心の葛藤に苦しむ。 4月、県立吉田高等学校に転勤する。大乗寺を知る。八木重吉詩集を見つける

1951(昭和26) **42歳**	毎年1冊詩集を出版を決意、4月、第一詩集「六魚庵天国」出版　裏表紙しは「悩みを突き抜けて歓喜に到れ」ベートーヴェンと記してている。 　　７月、大乗寺(河野宗寛老師)に参禅･真実の自己を求め、フラフラせず、グラグラせず、ただ一本の道を行く人間になりたい、本当の詩人となるため厳しい修行を始める。「暁天祈願」を始める。朝3時36分自宅の庭にある朴の木の下で祈願する。最初の言葉は「三つの祈り」である
1952(昭和27) **43歳**	3月23日2週間の旅に出る。足利紫山老師（94歳）他多くの人に合う。　母の念仏の探求心からか学年末の休みを活用して2週間の旅にでる。　杉村春苔尼と文通が始まる（推定） 3月29日、暁烏敏(あけがらすはや)師を訪問する。「疑えば花ひらかず信心清浄なれば花ひらいて仏をみたてまつる」の出典を聞くも「わしゃ知らん」とそっけない回答、自分で探すと決意を秘める
	何時からかは私には不明だが、杉村春苔尼との文通が始まる。大蔵経を読み始める。 「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」の詩が完成（仮説１）
1953(昭和28) **44歳**	3月27日杉村春苔尼（大詩母）に邂逅する。開眼の師、命の恩人、光と仰ぐ化身のお方である。大詩母さま・大詩霊さまと呼ぶ。わたしは先生を通して菩薩とつながり、仏とつながり、永遠なるものとつながる自己を知った。わたしが目を病み半盲となろうとしたと時、いくたびか夢に現れ、病む目にじっと手をあてて下さった。エル・グレコの聖母の絵に導かれるか？この人との邂逅は自分にとって大回心であった。この夏一万詩の発願をする 「めぐりあいの不思議」が完成する（仮説３） 　　5月16日母永眠、享年72歳　　厳しい参禅、厳しい自戒、激しい読書 　　利根白泉先生と邂逅（命の恩人）日時不明翌年かも知れない 　　大蔵経3回目一文字一文字指で押さえて読む・目を患う
1955(昭和30) **46歳**	10月18日、中心性漿液性網膜炎にかかり長い病院通いが始まる 杉村春苔尼若い観音像を描いて送ってくださった　「念ずれば花ひらく」の詩が完成する（仮説３）母の願いをわたしの詩の骨髄とする
	「半盲となりて」・子らゆえに/虚無にもならず/子らゆえに/悲しみに耐え/子らゆえに/死にもせず/子らゆえに/生を愛す
1956(昭和31) **47歳**	内臓の疾患、3人の医師から開腹手術を進められる。3月5日午前1時全身に激痛を覚え、それから昼も夜も間断なく苦しみ長い絶食と襲いくる死の恐怖のなかに、身も心も全く弱り果てていった。生死の境を彷徨する。利根白泉先生の言葉「あなたはどうして生きようとしないのか」によみがえる。それからというもの、わたしの体のいのちの火が燃え始め、次第に元気づいていった。生命の火が燃え始めたのだ。　　4月、県立宇和島東高等学校に転勤する。
1959(昭和34) **50歳**	60万人決定往生の引継ぎを思案
1962(昭和37) **53歳**	6月森信三先生を訪ねる。3回訪ね不惑の決意をする。森信三先生の即、実践力を目の辺りにみて、感動と決断、人生二度なしに不惑の思いつのる。朝鮮のかっての友人の名前を尋ねると、食事を手を止めて鞄からペンと便箋をとりだし、その人の住所を教えてくれた。この即実践に胸打たれ『詩国』の発刊を決意する。詩国」創刊の決意。7月個人誌「詩国」第一号発刊　500号迄続く「ペルソナ」を詩国に改題　個から衆への開眼、居をタンポポ堂と命名

1965(昭和40) 56歳	4月県立吉田高等学校に転勤
	9月第12詩集「もっこすの唄」　「二度とないじんせいだから」完成（仮説4）
1966(昭和41) 57歳	4月県立吉田高等学校を定年退職、1年間非常勤講師となる。
1967(昭和42) 58歳	2月、「自選坂村真民詩集」大東出版より刊行 。 4月、宇和島から松山に引っ越す。私立新田高等学校講師となる。 9月終の住処となる伊予砥部町の重信川の河畔に家を建てる
1968(昭和43) 59歳	NHKテレビ放映が多くなる　1月7日紀野一義先生と「西行法師」等 キリスト教幕屋創始者発行の「生命の光」を入手する
1969(昭和44) 60歳	杉村春苔尼僧（69歳）2月16日手紙、仏教者だけの詩人になって頂きたくない。愛溢れる手紙である。全国の刑務所に「自選坂村真民詩集」を納本する。
1970(昭和45) 61歳	「念すれば花ひらく」第1号碑が京都市、常照寺に建立される。12月ラジオ関西より4回に渡り「一遍上人」を放映
1972(昭和47) 63歳	「念ずれば花ひらく会」の代表・北野資子女史主催により大阪道頓堀朝日座にて長島愛生園、「青い鳥楽団」公演 11月23日幕屋創始者手島郁郎氏と松山空港で対面する。
1973(昭和48) 64歳	5月「念ずれば花ひらく会」主催で京都会館にて青い鳥楽団」公演 8月、初めて生地を訪れ、生家をみる。 12月、宝厳寺に「念ずれば花ひらく」第5番碑が立つ（真民先生のお墓）
1974(昭和49) 65歳	3月、私立新田高等学校を退職、4月妻と共に八十八巡礼の旅に出る 　7月、原爆詩「白いものはみんな骨にみえる」が現代音楽三つの悲歌の一つとして作曲され、NHK,FM放送される　重信川を渡って「明星礼拝」(彼岸の祈り）を始める
1975(昭和50) 66歳	「鳥は飛ばねばならぬ」詩完成　死生観の変化
1977(昭和52) 68歳	6月、杉村春苔尼逝去（霊となり新しいお姿となった）
1978(昭和53) 69歳	三祈願公開、ソ連の「原子炉衛星」カナダ上空に墜落。祈りの輪を広げる
1979(昭和54) 70歳	3月、神奈川県小田原市4つ子ちゃんに真民詩から命名。市長が長洲知事（当時）から紹介されていた。5月、第一随筆集「念ずれば花ひらく」柏樹社から刊行
1980(昭和55) 71歳	1月13日NHKテレビ宗教の時間にて、「祈りの詩」放映、2月23日から朝日新聞がこころのページ蘭に詩を掲載始める 4月文部省中学校教育課編『道徳指導資料三』に「二度とない人生だから」を採録 6月、第4回正力松太郎賞を受賞
1981(昭和56) 72歳	3月、随筆集「生きてゆく力がなくなる時」柏樹社から刊行。 　11月、「一遍上人語録-捨て果てて」大蔵出版から刊行　12月4日～8日上海、北京へ旅する
1983(昭和58) 74歳	4月、随筆集「愛の道しるべ」柏樹社から刊行、三部作完成 教科書中学道徳「生きる力」に「二度とない人生だから」採録 11月18日～25日ドイツ・フランス・ギリシャの旅にでる。

この年譜の作成には片山　克氏（元全国朴の会会長）の多大なご支援とご指導を頂きました。ここに感謝して記します。

1984(昭和59) 75歳	1月16日～19日NHKテレビ訪問インタビュー「念ずれば花ひらく」を作成、再映を加えると8回放映タイトル 8月31日、世界宗教者平和会議第4回世界会議がアフリカ・ケニアの首都ナイロビにて開催、その最終日黒人聖歌隊によって「二度とない人生だから」の詩が歌われた。 10月片山　克氏が訪問。ロビー展に賛同する。
1987(昭和62) 78歳	9月「四国を愛する坂村真民展」伊予銀行高松支店ロビー（世話人片山　克） 片山　克が「詩国朴の会」結成の許可を受ける。 11月『詩国』の解説版「詩国の朴」を片山　克が執筆発行　愛媛県教育文化賞受賞
1988(昭和63) 79歳	11月24日、小原靖夫が真民先生と出会う。（紹介者･田舞徳太郎氏）
1989(昭和64) 80歳　平成元年	1月7日昭和天皇崩御NHKは全番組を中止し昭和59年制作の「念ずれば花ひらく」を再放映する。 10月30日小田原市宝安寺社会事業部に第125番碑建立 11月、砥部町の開花亭に100番碑が建立される。
1990(平成02) 81歳	鍵山秀三郎タンポポ堂を訪ねる（紹介者片山　克氏） 1月、開花亭にて「朴庵例会」が開催（第1回）世話人
	5月、第一回「全国朴の会大会」が開花亭にて開催される。当番役・詩国朴の会
1991(平成03) 82歳	3月、第25回仏教伝道文化賞受賞 第2回全国朴の会大会が大阪で開催される。当番役大阪朴の会
1992(平成04) 83歳	5月30日、第3回「全国朴の会大会」岐阜県白川村で開催（当番役･湘南・箱根朴の会） 鍵山秀三郎氏に多大の援助を頂く。
1993(平成05) 84歳	5月28日、英文対訳「鳥は飛ばねばならぬ」坂井孝彦氏英訳詩発刊。 10月 マザー・テレサに届く　「詩国朴の会」朴の会本部世話人に片山　克を任命
1994(平成06) 85歳	3月31日、イスラエル、ヘブライ大学植物園に第303番碑建立 2月妻･久代くも膜下出血で倒れ入院、7月退院自宅療法となる
1995(平成07) 86歳	8月「全国朴の会」会長を片山　克に指名
1996(平成08) 87歳	11月、東京紀伊國屋サザンシアターにてビデオ「詩魂の源流」完成記念講演会開催　同日イスラエルヘブライ大学の植物園長イッツハク・アイアロン氏が表敬訪問・イルラエル文化功労賞（金賞）を授与される
1997(平成09) 88歳	『花の中の碑・平和を祈る・念すれば花ひらく・第303番碑物語』（おはらやすお著）
1998(平成10) 89歳	2月、朴庵例会100回を迎える
1999(平成11) 90歳	7月14日「念ずれば花ひらく」第505番碑が筑後市高江75―2に建立される。
2000(平成12) 91歳	5月、第7回全国朴の会大会がイエローハット山口流通センターで開催　世話人・鍵山秀三郎氏 11月、妻、久代、脳梗塞のため入院、手術を受ける。翌年4月退院
2001(平成13) 92歳	6月、砥部町より名誉市民賞を受賞
2002(平成14) 93歳	6月、第505番碑筑後市立病院へ移設

2003(平成15) **94歳**	11月、熊本県近代文化功労者賞を受賞
2004(平成16) **95歳**	1月6日、朴庵での例会第171回で終了すると発表。2月「詩国」第500号をもって最終とする。 2月1日『詩国』第500号記念第8回全国朴の会大会・ 第172回朴庵例会が松山市県民文化会館で開催 3月「鳩寿」第1号発刊3月熊本県玉名市の玉名高校に第700番碑が建立される。
2006(平成18) **97歳**	5月、この頃より体調管理とため砥部病院に入退院を繰り返す 8月再入院する。 12月11日老衰のため永眠。
2007(平成19)	『坂村真民全詩集」第8巻刊行。第1巻は1985年（大東出版社）
2008(平成20)	妻･久代さん永眠（91歳）
2009(平成21)	10月、生誕100年記念事業「紙墨展」「記念の集い」が開催される。
2012(平成24)	3月11日、坂村真民記念館完成
2017(平成29)	１月、第505番福岡県立八女高等学校に設置

この年譜の作成には片山　克氏（元全国朴の会会長）の多大なご支援とご指導を頂きました。ここに感謝して記します。
尚、この年譜は今後の研究の成果により訂正追加をします。

略解目次

略解１　第一子茜さん
略解２　八木重吉
略解３　杉村春苔尼僧
略解４　一遍上人
略解５　森信三先生
略解６　タンポポ

記号の説明
A 随筆集　念ずれば花ひらく
B.随筆集・生きてゆく力がなくなる時
C.随筆集・愛の道しるべ
いずれも柏樹社版です

J.自選・坂村真民詩集

略解１　第一子茜さん

⑵第2のどん底・第一子茜さんの生誕と召天　1941年（昭和16年）
茜さんとは真民先生夫妻の第一子の女児の名前です。ご夫妻に6年ぶりに奇跡のような喜びが訪れました。当時はまだ先生は和歌を詠まれていましたのでその喜びを沢山詠まれています。

あきらめて添ひ来し妻がみごもれや真白小米の返り花咲く
わが妻のおもひはつねに子ろにゆきすでに産衣を縫ひそめにける

大変な難産だったようです。生まれた間もなく召天されました。

目も見えず乳も飲み得ぬ子がひとり賽の河原にさまよふらむか

わたしはその晩、この命ははかない子と枕を並べて寝た　結婚当初から子どもはできないと言われていた私たち夫婦に、摩耶（釈尊の母）夫人と同じようにやっと恵まれた最初の子であった。
「すべては虚しい雲間の光であった、運命はわたしたち二人を地に突き落としてしまった。一切が闇となった。ただ、茜と名づけることによって、二人の心にやっと支えるだけの光と色とを見出して生き堪えたが、悲しみはなかなか癒えるものではなかった」C-50

生まれくる子ろを思ひて力湧き励みしこともいまはむなしき
妻も我も今の孤独は堪えがたし逝きにし子ろの名を呼びかはす
かなしみをひたしりぞけて昼はあり夜更けて涙とめどなく出づ

これは真民先生の第二のどん底です。慰め支えてくれたのは韓国の教え子たちでした。女生徒達が町中で一番美しい人形を探し求めてきて、どうか、このお人形を亡くなった茜ちゃんだと思って可愛がってくださいと、心をこめて贈ってくれ慰めました。奥様はそれを大変に喜び大切にしていました。、
茜と名づけることによって、朝に夕に空を染める茜雲とその人形でやっと心が支えられました。
茜　　蔓性多年草、山野に自生し、根は橙色、秋、白色の小花をつける。
茜雲　朝日や夕日を受けて茜色に映える雲

⑶引き揚げ時の艱難を救った茜人形
真民先生ご家族が朝鮮を引き揚げられるときに、この人形が奇跡をもたらし真民先生の信仰心を更に強めることになるのです。
それは次のような事実です。
日本が敗戦して日本という国の国土は現在の形になりましたから、朝鮮や中国満州は外地となり抑留される方、引き上げる方ともどの大変な苦労をされるのですが、真民先生ご家族は1945年11月に引き上げることができました。その時、1歳半の

長女と奥様は身重でお腹に中に胎児がおられました。引き揚げ者の荷物は限られていました。そんな中でも奥様はかなり大きい人形を持って帰ると激しく主張しました。人形には茜さんの魂が乗り移っていると奥様は考えていたようです。
汽車に乗り込むときも大騒ぎでしたが、船に乗るとき真民先生は軍服を着ていて検閲のため家族から引き離され、長女をおんぶして重い荷物と人形をもった奥様は歩けなくなり泣きだしそうになって伏してしまいました。周りには港を監視していたアメリカ人将校らしき人と兵隊さんが4〜5人いました。その方向に奥様はきっと人形を高く上げて助けを求めたのでしょう。美しい人形を一目見て兵隊さん達は先をあらそってみんなで荷物を船まで届けてくれました。人形が身代わりとなって真民先生家族を危難から救ったのです。真民先生は次のように書いておられます。「わたしは、あの時ほどわたしの霊感が働いたことはなかった。形見である人形が、母子三人の命を救ってくれた。今、わたしの一家族が、こうして無事にくらしていることができるのは、まったくこの子の霊のおかげなのである。そういうことから、わたしは、この子を通して霊魂の実在を信じ、信仰の道にも入り、また地蔵菩薩さまという方が本当に存在して、目も見えず乳も飲み得ぬ、この子をお守りくださっていることを確認することができた」このようにどん底から何かを学びなにかに導かれる、そして闇から光をみる信仰が真民先生の心の柱（心棒）になっていくのです。
戦争の惨禍は戦後にも及びます。朝鮮から引き揚げてこられたのは日本の敗戦の年の11月、何一つ持たず命からがらの引き揚げでした。こらは全ての引き揚げ者の悲劇でしたが、朝鮮にある日本人の財産は原則全て没収、日本へ送ることが許された物も殆ど到着しませんでした。真民先生も多くの書籍と何よりも貴重であったご自分の短歌の作品すべてが手元に届くことはありませんでした。

略解２　八木重吉

B-161八木重吉詩集との出会い
その詩は「花になりたい」八木重吉の代表作です。

えんぜるになりたい
花になりたい

真民先生の文章の引用を続けます「わたしは三千世界が、一時に花咲いた感じした。今までの紆余も曲折も消滅して、心の花が繚乱（りょうらん）と開いてゆくのを覚えた。これは今までの短歌の世界に全く感じたことのない驚きと喜びであった。霊的なものが電流のようにわたしの体を刺激した。

花がふってくると思う
花が散ってくると思う
この、てにひらにうけとろうとおもう

こころがたかぶってくると
わたしが花のそばへいって咲けといえば
花がひらくとおもわれてくる

綺麗な桜の花をみていると
そのひとすじの気持ちにうたれる

花はなぜうつくしいか
ひとすじの気持ちで咲いているからだ

真民先生が八木重吉氏に送った詩があります。

あなたが生きていたら/手をとり合って話したい気がする/林檎をむき合って食べたい気がする/一輪の花の心を二人で語り合いたい気がする/夕焼の雲の下に黙って坐っていても/
暖かく心は通う気がする/でもあなたはもうこの地上へはおりてこない/手を握り合うことも/林檎をたべあうことも/花を見　雲のかがやきを語りあうことも/できなくなってしまった/
ああせめて/あなたのいる天国の夢でもみよう/あなたと一緒に天国の園でも散歩しよう/そう思ってあなたの詩集を/今日もまくらべにおいて寝る（J-30)

彼の詩集がわたしを呼び止めた。彼も呼応の詩人であった、

よぶがゆえに/みえきたるものあり/よぶことなければ/きえゆくものあり
「念ずれば花ひらく」に通じるものがある

B-146　もえなければ、かがやかない　かがやかなければ　あたりは美しくない
わたしが死ななければ、世界は美しくない。

こういう燃えが本当の燃えである。つまり、死が永遠の光になる燃え方なのである。

B-209杉村春苔尼僧と八木重吉の関連、めぐりあいのふしぎ
弟が家庭教師として来てもらっていた。しどめの花

人と人との繋がりの不思議、つながる必要なものは、どこかで必然的につながる。縁ということに意味

略解３　杉村春苔尼

更に別の箇所で真民先生は「わたしの詩眼を開いてくれたのは、『八木重吉詩集』であった。ー中略ーその八木さんと先生（杉村春苔尼僧）との親しい交わりを知ったのは、ほんとうに大きな驚きであった」（八木重吉はクリスチャンです）
この杉村春苔尼は真民先生が「大詩母様」と敬仰する方です。
A-58 A-61　　かってわたしが死ぬような大患にかかったときのことです。枕らべに聖観音さまがお立ちになりーーー観音様は左手に宝敏を持っておられた、その中にはきっと不思議な霊薬が入っていたのでしょう。わたしはそのために地獄の一丁目どころではなく、全く入り口ちかくまで引きずり込まれていた危ない命を救ってもたったのでした。そのひとにはそんな超人間的な霊脳があるのです。アッシジの聖者を思い浮かべる。
一万詩の発願昭和２８年夏それを知らせたら「念願成就の日はお祝いに、お茶をたててくださるという嬉しいお便りをいただきました。わたしは千万力を得たようなきがいたしまして、一途に専念し、そのひとと向かい合って、楽しいひとときを過ごそうと、今から胸をおどられています。先生からは「仏心」をいただいた（ここが焦点である）
詩があるA-66　　昭和２８年3月27日召天風の中にわたしは立つ、風の中で先生を思う。それは今までの風とちがって、命と光とを持つ風である。わたしを更に生かし、更に励まし、更に見守り，更に導いてくれる風である。
わたしが伊予吉田の大乗寺の禅門をくぐるようになって、まず聞かされたのがここに暫く身をひそめて過ごしていられた春子夫人のことであった。
A-196から　　仏縁の広大にして無辺なことを初めて体験した3月27日杉村春苔尼（大詩母）に邂逅する。開眼の師、命の恩人、光と仰ぐ化身のお方である。大詩母さま・大詩霊さまと呼ぶ。わたしは先生を通して菩薩とつながり、仏とつながり、永遠なるものとつながる自己を知った。エル・グレコの聖母の絵に導かれるか？
この人との邂逅は自分にとって大回心であった。この夏一万詩の発願をする
　B-81足利紫山老師（お顔の良さ）と杉村春苔尼がよく似ている。わたしは初めて無碍無辺の仏の明るい大きな世界を知り得た。その面の光にまず打たれたのであった。全く同じ面だあった。後に分かっておどろいたことだが、足利紫山老師と杉村春苔尼僧は師弟関係にあった。人間の面の良さは自然をその中に持っているか否かである。

B-105この一期一会によってわたしの一切が変わった。新しい人生が開始されたと言ってもよいであろう。
C-27わたしは先生の愛の道しるべの大きさに打たれ目の見える人間になりました。
C-218　個人歴もある。先生の手紙はわたしの灯台の光であり、尊い道しるべであった。相手の人に光明と平安を与える手紙ー大悲大慈の人である。C-223仏教者だけの詩人になって頂きたくない。中略ー坂村先生の静かなものの中から大きな動を、道にころがる小石の中にも過去未来を見、石や花と対話のできる、そして無想の相の広大さを悟っていられる真民先生をお幸せだと思いました。どうぞご尊体充分お気をつけになって長寿なさって下さい。たいそう60の坂を気にしていられますが、先生の詩命は未だ未だ終わりません。先生には御仏がついていられます。しかし御養生をなさる事も仏法の法、これをお破りになりませんよう御精進くださいませ。

略解４　一遍上人

A-137一遍のどこに惹かれるのか　涼しさ･軽さ　これは法然にもなく、親鸞にもなく、道元にもなく日蓮にもなく一遍独自の風向であり、人柄である
タンポポの種（綿毛）のように軽くなって飛んでいく飛び立っていくのが好きだーー軽さの共通点、軽さが涼しさとなる。それは無一物が、無尽蔵となるようなものである。A-143 この涼しさこそ如来の風なのだ。

日本独自の仏教A-143軽さ涼しさは遍歴からきている。
仏法とは涼しき風なのだ。リンリン･凛々　雲のように軽い。それがわたしには、何とも言えず親しいのである。何一つのこそうとしなかったことがサラリサラリとした生き方何とも言えない共感が湧いてくるのである。

空也は市聖、一遍は捨聖　捨てた者の世界は広い。わたしは無一物になりきった一遍の、あの純粋さに心ひかれる、一途さに心うたれる。

A-170 破れ衣にはだしのあの姿は、世尊の糞雑衣（ふんぞうえ）を思い出させる。生誕地を訪れたのは宇和島にいる頃であった。

A-186捨て果てての詩がある。　一切の権威も彼の眼中になかった。一切の野心も彼の心中になかった道元にもない、法然にもない、親鸞にもない、どん底的なものが一遍にはあった。そのどん底的なものが　わたしを惹きつけて止まないA-198

C-239一遍ほど下に降り、民衆と共に生きた祖師はいない」念願詩誌『詩国』を出しているのは一遍の願いを受け継いでゆこうと念じていたからである。杉村春苔尼僧の三者を結ぶ者　山河称名　杉村春苔尼僧は山河一体のお方だ、紫山老師と同じ方だ.杉村春苔尼僧は紫山老師に師事していた。
「竹」という文字A-167涼しい一字=竹。字は一字でははく、竹は一本でなく、もう山河そのものであり」、万有一如の天然自然、鳥が飛んでいる。花が咲いている山河と一つになるということは、そうやすやすと誰にでもできるものではなく、だれもがなれるものではない。仏陀も晩年この世界のなかにおられた。涅槃に入ろうとなさるとき、蝶を礼拝されたという話しを読んだのであるがわたしはかってないほどの感動を受けた。仏陀世尊を思うとき一遍を思う

長い間わたしの先達は芭蕉であった、一遍を知るに及んでこれまでにない新しい世界を見出した。一遍の思想が芭蕉にながれている。捨、一遍51歳、芭蕉も51歳と生涯が同じ

略解５　森信三先生

私たち身近なところで実践されていることは
「しつけの三原則」
①朝のあいさつをする子にーそれには先ず親の方からさそい水を出す
②「ハイ」とはっきり返事のできる子にーそれには母親が、主人に呼ばれたら必ず「ハイ」と返事をすること
③席を立ったら必ずイスを入れ、ハキモノを脱いだら必ずそろえる子に
教職の先生方には
①時を守り
②場を浄め
③礼を正す。
これ現実界における再建の三大原理にしていかなる時･処にも当てはまるべし

全ての人へのメッセージ
立腰教育ーつねに腰骨をシャンと立てること
これ人間の根性の入る極秘伝なり
人間は心身相即的存在ゆえ、性根を確かなものにしようと思えばまず躰から押さえてかからねばならぬ。それゆえ二六時中「腰骨を立てる」以外に真に主体的な人間になるキメ手はない。
「腰骨を立てる」ことはエネルギーの不尽の源泉を貯えることである。この一事をわが子にしつけ得たら、親としてわが子への最大の贈り物といってよい。①腰骨を

立て②アゴを引き③つねに下腹の力を抜かぬこと。同時にこの③が守れたら、ある意味では達人の境といえよう

略解６　タンポポ

A-114タンポポは生きてゆかねばならない戦いの中から身近になり、わたし独自のものとなった。この虐げられた民のために、この地に骨を埋めようと決意したのも単なる人間愛からではなく、わたしの野草的な血のうずきなのであった。タンポポはそういう反抗的、反権威的なものを持っている。反貴族的な野の花なのだ。床の間の花ではなく、大地の花なのである。タンポポが人の目に入ってきたのは江戸庶民が頭を出してからである。こういう不運な長い歳月を待っているだけに、わたしはこの花が一惜しいのである。幸せをまき散らす花、神託の花という花ことばも実にいい。わたしはタンポポを全人類の花としたいのである。わたしはタンポポが好きだから居るところをタンポポ堂と言っているが、その根は実に深くその種はまことに軽い。タンポポの種（綿毛）のように軽くなって飛んでいく、ああ、あれが天の教えではなかろうかとA-119

B-28わたしはわたしのいる処をタンポポ堂といっているが、この野草の生命力をわが生命力としてあやかりたいからである。

B-145タンポポたちの燃えるような美しさは、わたしに色々のことを教えてくれる。まさにわたしにとってはタンポポは仏であり、菩薩である。B-146　もえなければ、かがやかない　かがやかなければ　あたりは美しくない　わたしが死ななければ、世界は美しくない。こういう燃えが本当の燃えである。つまり、死が永遠の光になる燃え方なのである。

B-154　タンポポの花言葉は、神託の花と言い、幸せをまき散らす花とも言う。

B-163わたしの愛する花タンポポは野の花であり、大地の片隅に咲いている雑草であるが、お星さまの落とした金貨と言われるほど、純一で素朴な明るい花である。花はなぜ美しいか　ひと筋の気持ちでさいているからだ（八木重吉詩集）
B-73 わたしが居をタンポポ堂と名づけているのはタンポポがすきだから、この狭い部屋（６畳間）を書斎とし、坐禅堂とし、祈りの密室としている。
B-151母のように強くいきたい

この略解は研究進捗によって訂正加筆されます。本文に組み入れることもあります